2. 総合科学部創立 50 周年記念事業

記念シンポジウム
世界で活躍するひろだいそうか

2023 年 4 月に総合科学部創立 50 周年記念事業準備委員会が設置された。シンポジウムの内容についていくつかの案が出されたが、最終的に、世代、業界を異にする同窓生に登壇を依頼し、総合科学部で学んだことなどを短い時間でスピーチしていただくという案が 2023 年 8 月の準備委員会で承認された。登壇者の選定にあたっては、異なる分野の融合と協働を推進する総合科学部の理念に沿って、世代、ジェンダー、出身国、そして現在活躍されている業界の多様性に配慮した。最終的に、学術、行政、メディアの各分野、産業界で活躍する同窓生８名、さらに総合科学部で長年教鞭をとってきた教員１名の合計９名の方にスピーチをお願いすることになった。

シンポジウムは 2024 年 7 月 20 日にサタケ・メモリアルホールで開催された。9 名のスピーカーに、まず「総科で何を学んだか、そしてその学びが現在の自分や自分の仕事にどのように役立ったか」について 5 分間のスピーチをしていただいた。その後、総合科学部教員を司会として、スピーカー全員が登壇し、「ひろだいそうかの 50 年―現代世界と総合科学の可能性－」と題して約 70 分間の総合討論を行った。総合討論では、授業（「総合科学へのいざない」および「国際共創へのいざないⅠ」）を通して総合科学部１年次生から出された質問を司会が集約し、総合科学部で学ぶことの意義や総合科学とは何かなどについて、スピーカーがそれぞれの現場での経験を挙げながら発言し、討論が行われた。スピーチおよび総合討論は、すべて英語へと同時通訳された。

シンポジウム終了後には、学士会館２階のレセプションホールにて、登壇者や同窓生、教職員、学生が参加する交流会を開催した。交流会では登壇者のもとへ学生が歩み寄り、質問する様子なども見られた。シンポジウムには、学生 159 名を含む 242 名が参加し、交流会には 81 名が参加した。

次ページ以降はシンポジウム全体の記録である。

（広島大学大学院人間社会科学研究科・総合科学部 教授　長坂 格）

河本氏：ご来場の皆様、定刻になりましたので、総合科学部創立 50 周年記念シンポジウムを開始いたします。本日のシンポジウムの総合司会を務めます河本と申します。どうぞよろしくお願いいたします。本日のシンポジウムは英語での同時通訳を行っております。同時通訳は谷本秀康先生と野田等志江様にお願いしております。それでは開演にあたり、総合科学部長である山田俊弘よりご挨拶申し上げます。山田学部長、よろしくお願いいたします。

山田氏：こんにちは。総合科学部長の山田俊弘です。まずは、ご来場の皆様にお礼を申し上げさせてください。本日はご多用中にもかかわらず、広島大学総合科学部創立 50 周年記念シンポジウムにご来場いただき、誠にありがとうございます。

広島大学全体から見ると、今年は創立 75 周年にあたります。そして、最も古い前身校である白島学校が設立された時から数えると、ちょうど 150 周年にあたります。そのような記念すべき年に、広島大学総合科学部は、創立 50 周年を迎えました。今日は、広島大学総合科学部創立 50 周年を記念するシンポジウムを開催します。

さて、「はじめに」の時間を使って私は、シンポジウムの趣旨を紹介しようと思います。

前学部長の関矢先生が、総合科学部創立５０周年を記念するシンポジウム、つまりこのシンポジウムの実施を発案されたのは、２年前のことだったと記憶しています。以来、長坂先生を中心に、シンポジウムの具体化の検討がすすめられてきました。その中で一番の問題だったのは、シンポジウムのテーマを何にするか、でした。

度重なる議論の中で、総合科学部卒業生に、社会で活躍するうえで重要なことが何であるのかを語ってもらい、それを議論するシンポジウムにしたいというアイデアに至りました。

私たちがそう考えたのには、意味があります。それを紹介いたします。

広島大学総合科学部は、全国にさきがけ、いわゆる新構想学部の一つとして 1974 年 6 月 7 日に設置されました。本学部の前身は 1923 年に設置された旧制広島高等学校です。旧制広高の伝統は旧教養部に受け継がれましたが、本学部は、この旧教養部を直接の母体としています。ですから、初めから多様な学問が集まる組織として存在していたことになります。しかし、その当時は、学問が有機的に結びつく場ではありませんでした。その組織が 50 年前、学問を有機的に結合させ、それを鍛え、教育する「総合科学」の実践の場として歩みを始めたのです。

この 50 年の間に総合科学部は、ざっと見積もっても 7000 人ほどの卒業生を輩出してきました。そのそれぞれは、社会で活躍する、とても優秀な人材に育っています。そして、間違いなく彼・彼女らが、総合科学部の一番の誇りであります。

総合科学部が、教育にこのように成功できたのは、「学際性・総合性・創造性を基本理念とし、総合的知見と思考力を涵養するため、教育をおこなう」という、総合科学部独自の教育理念にあったのだと信じております。

ところで、2021 年に内閣府は、第六期科学技術・イノベーション基本計画を策定しています。その中では、「多様な『知』が集い、新たな価値を創出する『知の活力』を生むこと」と定義された総合知の重要性が叫ばれています。これは、本学部が 50 年間掲げた理念に合致しています。50 年たって、時代が追い付いた、といったところでしょうか。

さて、内閣府が言う通り、ひとつひとつの総合知が、人々に真に求められている知見であることは言うまでもありません。しかし、いかなる総合知も、人によって生み出されることは忘れてはなりません。つまり、総合知そのものよりも、それを生み出すことのできる人材のほうが重要であるということです。なぜならば、そのような能力

を持つ人からは、総合知が次々と生み出されるからです。

総合科学部では 50 年間、こうした能力を持つ人を育てることに努力してまいりました。そしてその結果、例えば、物事を俯瞰的にとらえながら問題解決を探ることができるような卒業生を社会に送り出してきました。

本日は、手塩にかけて育て上げた総合科学部卒業生 8 名を含む 9 名の方々にご登壇いただきます。9 名の方々のうち 2 名の先生方は総合科学部で長く教育にかかわっていただいております。彼・彼女たちからは、「社会で活躍するうえで重要なこと」に関するお話の中で、「総合科学部のこういうところがよかった」というお話が聞けることを期待しています。が、案外、「総合科学部のこういうところがダメだった」というお話になるかもしれません。いずれにせよ、私自身、とても楽しみにしております。

もちろん、過去を振り返るだけのシンポジウムではありません。総合科学部の次の 50 年に向けて、大切な一歩となるようなシンポジウムにもしたいと思っています。つまり、総合科学部がこれから進むべき方向の指針となるような議論ができることも、大いに期待するところです。

ずいぶん長く話してしまいました。シンポジウムが待ちきれないといったご様子なので、私の話はこれで終わりにします。河本先生、ご登壇者の皆様、後はよろしくお願いします。ご来場の皆様、どうぞお楽しみ下さい！

河本氏：山田学部長、どうもありがとうございました。本日のスケジュールをご案内申し上げます。シンポジウムは 2 部制になっております。まず第 1 部では「世界で活躍するひろだいそうか　スピーカーによる 5 分間スピーチ」として 9 名のスピーカーの方々に総科で何を学んだか、そしてその学びが現在のご自分やご自分のお仕事にどのように役立ったか、というテーマでお 1 人当たり 5 分間お話しいただきます。チラシでご紹介させていただいておりますスピーカーの方々は、多様性を尊重し、異なる分野の融合と協働を推進する総合科学部の理念に沿って、世代、ジェンダー、出身国、そして学術、行政、メディア、産業界など、現在ご活躍されている分野の多様性に配慮しつつ、総合科学部 50 周年事業準備委員会が選出し、依頼をいたしました。その後、15 時から 15 分間の休憩を挟み、第 2 部に移ります。第 2 部は、総合討論「ひろだいそうかの 50 年　現代世界と総合科学の可能性」と題し、16 時 25 分まで行う予定です。総合討論では、御来場の皆様からスピーカーの方々への御質問を承ります。各界で活躍する総合科学部の卒業生に直接質問できる機会ですので、伺いたいことがある方は総合討論の時間にぜひご質問ください。なお、このシンポジウムは、ご登壇者の方々のご了解を得て録画を行います。関係者に限定して一定期間視聴できるようにし、ファカルティーデベロップメントなどで利用させていただきたいと考えております。また、シンポジウムの録画の一部や画像を総合科学部の広報に使用することも予定しておりますので、あらかじめご了承ください。

それでは、第 1 部「世界で活躍するひろだいそうか　スピーカーによる 5 分間スピーチ」として 9 名の方々にご登壇いただき、スピーチを行っていただきたいと思います。まず初めに、フンク・カロリン先生からお願いしたいと思いますので、壇上にお上がりください。フンク・カロリン先生は総合科学部教授で、2024 年より国際共創学科長をしておられます。先生のご専門は観光地理学、特に持続可能な観光発展と島における観光について研究・教育しておられます。では、どうぞよろしくお願いいたします。

フンク氏：みなさん、こんにちは。今日このシンポジウムに呼んでいただいてどうもありがとうございます。スピーカーの中で私だけ総合科学部の卒業生ではありません。しかし、私の専門である地理学は総合科学に近い専門です。理系と文系も含めますので。また、ドイツの大学を出た時は、総合科学部と同じように受講する科目を自由に選べるシステムでしたので、そこも多分総合科学部と似た経験をしたかと思います。26 年間、今総合科学部で教えております。その中で学んだことについて今日少しお話ししたいと思います。

学んだかどうかははてなが付きますが。まず 1 つ目は、最初から辛口で申し訳ありませんが、総科で学んだことは人とぶつかりながらも前に進むことでした。私は合気道をやっていますけど、その中でも対立した相手と動きを通じて同じ方向に向き直すという発想があります。それと共通しますが、実際はそうきれいにはいきません。総科の教員会は、 教員会の中でも、また全学から説明に来た学長などの役員に対しても、歯に衣着せず発言することで有名です。総科の教員会はいつも怖かったです、という話を、ある役員から定年後に伺いました。しかし、教員同士でも専門分野、出身大学、年齢、国籍などが実に多様であることもあって、時に激しくぶつかり合います。昔、飲み会で殴り合った同僚の間に入って止めたこともあります。その後また仲良く飲み続けたことも覚えています。IGS、国際共創学科を立ち上げる時も、学内でかなり意見が分かれて激しく喧嘩したこともあります。飲み会で議論し合うことも珍しくありません。私は喧嘩しない家族で育ったので、とてもつらい経験ですが、ある意味で当然のことだと思います。例えば、学際性は大事ですと皆が合意しても、それは具体的に何を意味するのか人により考えが異なります。その総科に IGS が加わったことによって、更に教員と学生の多様性が増えて、このようなことが起こり得るのか？と思うことも日々多くあります。以前、このようによくぶつかり合って喧嘩する同僚達とシンポジウムのために他大学に行きました。そうするとその他大学の先生達に、あなた達仲いいですよね、といわれました。つまりぶつかり合いながら前に進んだということです。そのように意見をぶつけても、相手を尊敬して、冷静になってから謝ったり、説明したり、嫌な思いを流して次に会った時に明るく、おはようございます、といえるようになることはとても大切だと思います。それこそ重要なコミュニケーション能力だと思います。定年までにその能力が身に付くかどうかは少し微妙ではありますが。

もう 1 つ、総科で学んだことは、安心した箱に潜り込まない、自分の組織にはまらない、ということです。大学の中で総科は開かれた学部として重要な存在です。総科の教員は教養教育の授業を全学に提供して、また、IGS で提供している英語の授業は他学部の学生や交換留学生も取ります。私は 3 年間副学長を務めたことがありますが、その時他学部、全学の状況に接する機会が増えて、学内の多くの壁の存在に気付きました。教員も学生も多様な総科は、ある意味で全学をつないで発酵材になっているといえます。発酵材である以上、全学から色々要求されて大変だったこともありますが、総科の周りに壁を立てたら存在の意味がなくなります。つねに箱の外の世界を見ることも総科で学びました。

最後に、私は外国人として 26 年間総科で勤めたので、もちろん日本の社会を勉強する場にもなりました。原則、という便利な言葉と、そこから生まれる柔軟性、根回しの重要さと面倒くささ、互いの助け合い、簡単過ぎる諦め、従うことと抵抗することの微妙なバランスなど、いずれも私の視野を広げる経験でした。2006 年に総合科学研究会を立ち上げました。その時に越境のアドベンチャーというキャッチフレーズでシンポジウムが開かれました。そして IGS を設立した時も、Exploring the World Beyond Borders というスローガンを選びました。総科はこれからも、学生、教職員、卒業生、その他総科に接する皆様にとって、越境のアドベンチャー、Exploring the World Beyond Borders になることを私は楽しみにしております。今日は、ご清聴いただきありがとうございました。

河本氏：フンク先生、ありがとうございました。2 人目の登壇者は、井手雅春様です。壇上にお上がりください。井手様は、1984 年朝日新聞社に入社され、広島総局長、大阪本社社会部長、論説副主幹、東京本社編成局長補佐、西部本社編集局長を歴任されました。2019 年 6 月、株式会社広島ホームテレビ常務に就任され、2024 年 6 月より株式会社広島ホームテレビ専務取締役をしておられます。朝日新聞での記者時代は、主に検察、裁判など司法分野を取材され、日本弁護士連合会市民会議副議長、大阪地方裁判所委員を務められました。現在は、ビジネス・編成部門を担当しておられます。それでは井手様、どうぞよろしくお願いいたします。

井手氏：みなさん、こんにちは。御紹介いただきました井手雅春と申します。私は、マスコミに入るために総合科学部を選んだ人間です。マスコミを将来の仕事として意識したのは、確か中学生の時だったと記憶しています。通っていた塾の先生から、「文章を書く仕事が向いているんじゃないか」といわれたことがきっかけでした。大学受験の際も、マスコミに就職実績のある大学を目指しました。マスコミの就職といえば、当時も今もや

はり早稲田が一番です。ただ、文系のくせに英語が苦手で、他の教科でカバーする、いわゆる国公立型だった私に、早稲田を目指す選択肢はありませんでした。自然、国公立大学、中でも地元の広島大学が第 1 選択肢になりました。広大ならどこで学ぶか。志望先を考えていた 1979 年、マスコミは日本で、世界で起きるあらゆる事象や事件、事故、災害などを取材し、論評の対象にする。専門知識だけではなく、文系から理系まで幅広いジャンルを学び、表現できるようにならなければいけない、と考えるようになりました。

その時、既存の学問分野の枠にとらわれない文理融合の教育、研究を掲げて 1974 年に設立されたばかりだったこの総合科学部が目に飛び込んできました。学ぶならここしかない、と決めて総合科学部一本に絞り、1980 年、入学することができました。

学生生活は期待通りでした。同級生たちはまさに多士済々。情報工学、自然科学、語学、文学、社会科学など、様々な学びの指向、ディレクションと、もう 1 つの思考、シンキングを持った仲間が集まっていました。講義の合間には、これは時にはサボっても、ですけれども、当時の東千田キャンパスの総合科学部棟にあった半地下の準備室でワイワイガヤガヤ、今でいうダイバーシティを体現したような環境でありました。コンピュータープログラムが必修になっているなど、当時としては先進的なカリキュラムも魅力的でした。

その総合科学部で得た最大の財産は、社会学者の故湯﨑稔教授との出会いでした。湯﨑稔教授は、今の広島県知事、湯﨑英彦氏のお父様です。広島大学原爆放射能医学研究所、現在の広島大学原爆放射線医科学研究所の助手だった 1969 年に、丹念な現地調査により空白のままだった戦前の爆心地の復元を成し遂げたことで知られた方です。今ここに映し出されているのは、湯﨑先生達が作り上げられた復元市街地図です。今はもっと詳しくなっておりまして、中国新聞社のサイトを見れば、さらにこの空白の部分が埋められたものが出ております。湯﨑先生は、講義では私たち学生に向かって、「広島に学ぶ学生は原爆を研究するべきだ」、また、「現場を回ること、フィールドワークが大切だ」と熱心に語っておられました。

広島に生まれて広島に育ち、幼い頃から祖父や父、叔母の被爆体験を聞かされて育った私には、なぜ今更原爆を？　という浅はかな思いもあって、湯﨑先生のゼミには入らず、イギリスの社会保障制度という文献調査を中心にしたテーマを卒業研究に選びました。そんな私に湯﨑先生は、新聞なら全国紙に行きなさい、と朝日新聞社に推薦状を書いてくださったのです。

湯﨑先生は私が朝日新聞社に入社した 1984 年に 53 歳の若さで亡くなられました。記者の経験を重ねるにつれ、現場を踏むこと、当事者から直接話を聞くことが事実に迫るためにいかに大切なのかを思い知らされました。警察など当局の発表は、どんなに詳細であっても間接情報でしかなく事実とは限らない。報道し尽くされたと思っていた原爆についても、1985 年に中国新聞社が、広島市南区段原地区の医師が保存していた市制の原爆手帳や献身カルテを元に被爆者の現状を探った「広島 40 年、段原の 700 人」という連載に衝撃を受けました。まだまだ報じられていないことがたくさんあるのだと。湯﨑先生から学んだことは、その後の記者人生の糧になりました。ネットに不正確な伝聞や間接情報、あまつさえ虚偽の情報が溢れ返る今、その大切さを痛感しています。

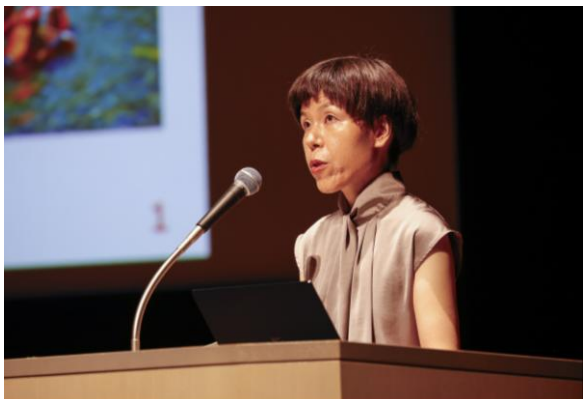
朝日新聞社では、社会部で主に司法分野を担当しました。裁判所には、原子力発電所の運転差し止めから刑事事件、離婚問題までありとあらゆる種類のトラブルや、いわゆる境界領域の案件が持ち込まれます。司法取材の現場で必要とされた多様な知識と価値観を身に付け、原稿に表現できるようになれたことの素地は、この総合科学部での学びにあったと確信しているところです。またそのほかにも、総合科学部での学びが私の新聞記者としてのキャリアで大きな意味を持ったことについては、もし機会がありましたら後の総合討論でお話できればと思っています。ご清聴ありがとうございました。

河本氏：井手様、ありがとうございました。3 人目の登壇者は、石橋留美子様です。壇上にお上がりください。石橋様は、益田市の受託で 2008 年度から益田市匹見町まちづくりコーディネータ

ーをされ、2020年度以降は美都および匹見地域を活動エリアとして、情報発信や関係人口の拡大、地域活性化を担う益田市まちづくりコーディネーターをしておられます。それでは石橋様、どうぞよろしくお願いいたします。

石橋氏：みなさん、こんにちは。私は過疎発祥の地として知られる島根県益田市匹見町からまいりました、石橋留美子と申します。総合科学部創立 50 周年の節目に、このような素晴らしい場でお話をいただけること、大変光栄に思います。

時はさかのぼること 30 年前、私が高校生だった頃、インターネットは普及しておらず、大学に関する情報は限られていました。受験勉強に追われる中、将来の夢や進路について考える余裕もなく、文系、理系の両方学べる総合科学部を選びました。幼い頃から興味のあったインカ帝国の研究をしている教授がいらっしゃったことも決め手の 1 つでした。しかし入学後、その教授が別の大学に移られたことを知りました。受験勉強から解放され、社会勉強と称してアルバイトに明け暮れる日々が始まりました。小学生と一緒に洋上を旅するアルバイトを通じて教員を目指す夢を見つけましたが、画一的な教育に違和感を感じ、断念しました。所属していた地域文化コースで文化人類学やフィールドワークを学びつつ進路に迷っていた大学 3 年生の時、社会科学コースのゼミに参加し、米軍基地の調査や住民の聞き取り調査を行いました。また、選挙事務所での活動を通じて報道に興味を持ち、新聞社を受験しましたが縁がありませんでした。進路を決めきれぬまま、卒業後は広島のテレビ局で報道カメラマンのアシスタントとして働き、地元に戻った後は新聞社で営業や取材、FM ラジオ局の立ち上げに携わりました。その後、フリーのライターとして活動を始めました。ちょうど市町村合併の時期と重なったこともあり、匹見町の歴史を編纂する仕事をいただくことになります。1 か月の半分を匹見町に滞在して町民にヒアリングし、残りの半月は自宅で執筆をするという作業を 2 年間続けました。滞在型の匹見町史の編纂は、まさにフィールドワークそのものでした。



まさか大学の学びが仕事で活かされることになるとは思ってもいませんでした。そしてこのフィールドワークの経験が、匹見町のまちづくりコーディネーターという大役をいただくことに繋がりました。大好きな匹見町で仕事ができるのはありがたかったのですが、まちづくりの経験は皆無でした。まちづくりは 1 人の力では到底成し得ないものです。地縁、血縁のないよそ者が、匹見町で生活しながら信頼を得るために結果を出す必要にも迫られ、かなり気張っていました。地域に興味や関心を持ち、現場に出かけて自分の目で確かめ、住民と対話し、行動を起こす。迷った時はこの原点に立ち返るようにしています。今思えば、座学だけでなく、実地調査などの様々な経験、学生のやりたいという思いに寄り添う柔軟な教育環境で育てていただいたことが、まちづくりという無から有を生み出す仕事に活かされていると思います。匹見町で仕事をしていて、うれしい出来事もありました。2015 年、広島大学大学院の福田恵先生から匹見町での調査実習の依頼があり、2016 年以降、4 回にわたって後輩たちが匹見に来てくれたことは大変うれしく、また心強いものでした。総科の卒業生として、私は周り道をし、泥臭い道を歩んできたかもしれません。決してみなさんのお手本になる先輩ではないと思うのですが、もしこれから何をしたら良いか分からないという学生さんがいれば、何でもいいので自分にたくさんの経験を与えてあげてほしいと思います。人生は長く、そして短い。今という瞬間を存分に楽しみ、また味わっていただきたいと思います。以上で私のスピーチを終わります。ご清聴ありがとうございました。

河本氏：石橋様、ありがとうございました。4 人目の登壇者は片山春菜先生です。壇上にお上がりください。片山先生は、広島大学大学院先進理工系科学研究科で助教をしておられます。片山先生のご専門は量子論で、直接観測が難しい宇宙で起きている現象を、実験室系で疑似的に再現するシステムの提案を行っておられます。それでは片山先生、どうぞよろしくお願いいたします。

片山氏：みなさん、こんにちは。今ご紹介いただ

きました助教の片山です。今日はこのような貴重な機会をいただき、ありがとうございます。私が総合科学部を選んだのは、1 年間学問体系を学んだ後に専門分野を選ぶことができることが凄く魅力的に思ったからです。私が高校生の時、自分の興味がどこにあるかっていうのがはっきりしなくて、受験の段階で専門分野を選ぶことができませんでした。自分の学びたいと思える学問に出会えればと思い、総合科学部に入学することを決めました。

入学してからは、広く深く学ぶということを意識して取り組むようにしました。勿論、最終的には自分の専門分野を選ぶことになるので、全ての分野を深く学ぶことは難しいことだと思います。しかし、もし狭く深く学ぶようになってしまい、自分の専門分野だけの勉強を行うようになってしまっては総合科学部にいる意味がなくなってしまうと思い、意識は常に広く深く学ぶようにしていました。その意識の下、物理や化学、数学といった自然科学分野の他にも、心理学や社会学といった他分野の授業を積極的に受講しました。

また、異なる分野の友人にも積極的に出会うように努めました。こうして様々な学問に出会い、様々な考え方に触れることができました。そして、自然界のことを数式で表わし、そこから新しい真理を見つける物理学の楽しさに魅かれ、物性授業科目群を選択することにしました。物性科学授業科目群は学生が少なくて少し寂しいと感じる時もありましたが、先生とマンツーマンで勉強することも多く、逆に他の学部では到底真似できないような手厚い指導を受けさせていただきました。そのお陰で、物理学を深く学ぶことができました。当初の目標であった広く深く学ぶことが十分にできたかは分かりませんが、自分の専門分野だけではなくて他の分野にも興味を持って学ぶことで、多角的な視点を身につけることができたのではないかと思っています。

現在私は、現代物理学の最大の課題である一般相対性理論と量子力学の統一に向けて、宇宙では観測することができない現象を電気回路の中で模倣するという、既存の学問ではない新しい切り口の研究を行っております。つまり、この研究は物理学における融合研究で、物性物理学の立場から宇宙物理学に切り込んだ狭い意味での越境科学といえます。そのためこの研究を行なう上で、総合科学部で培った多角的な視点が非常に役に立っています。この学際的な研究を行なう上で、専門的な知識が十分ではないと感じることも多くあります。1 つの分野に絞れば、この不安や課題は解消されると思います。しかし、私は多角的な視点こそが新しい発見を生み出すと思っています。そのような発見をすることが、研究する上での楽しさやワクワクに繋がると思っています。専門的な知識が十分でないことへの不安で歩みが止まりそうになる時もありますが、その時は総合科学部で広く深く学ぶことを心掛けていた経験が私を新しい分野に踏み出す勇気を与えてくれ、後押ししてくれます。短期的な専門知識の優劣ではなく、1 歩踏み出す勇気、その精神を培ったことこそが総合科学部の魅力だと思っています。

現在に至るまでには、進路のことでもたくさん悩みましたし、不安や葛藤もありました。友人が就職していく中で、私だけがこのまま学生を続けていいのかっていう不安や焦りもあり、大学院に進学せずに一般企業へ就職することも考えたこともあります。しかし、複数のインターンシップに参加し、就職活動をしていく中で、やはり研究を続けたいという気持ちが強くなりました。指導教員の先生や家族、友人に相談して励まされ、自分のやりたいことを続けるのが一番だと思い、最終的には研究者になることを選びました。元々物理学を学ぶ予定すらなかった私が、このように物理学を楽しいと思い、教育、研究を職とするようになったのは、総合科学部に入り、恩師と学問に出会うことができたからだと思っています。

心から総合科学部に感謝したいと思います。これからもワクワクする研究を学生さんと一緒にやっていけたらと思っています。以上で終わります。ご清聴ありがとうございました。

河本氏：片山先生、ありがとうございました。5 人目のご登壇は、コモルシリグン・グリット様です。どうぞ壇上にお上がりください。コモルシリグン様はタイのご出身で、国際共創学科の第 1 期生で

す。現在は株式会社 Wayfarer に勤務しておられます。国際共創学科で培ったコミュニケーション能力と観光学の知見を駆使し、旅行業界でオペレーションコーディネーターとして活躍しておられます。それではコモルシリグン様、どうぞよろしくお願いいたします。

コモルシリグン氏：尊敬する先生方、いつも献身的に支えてくれる事務の皆様、また同僚の皆様、こんにちは。本日、みなさんの前でスピーチをさせていただくことを本当に光栄に思います。広島大学の国際共創学科が、私の個人、また社会人としての歩みに大きな影響を与えてくれたことを振り返りながら、このスピーチをすることができることを光栄に思います。今みなさんの前に立つと、私達が生きている世界を理解するため、講義やディスカッション、そして研究プロジェクトに費やした多くの時間を思い出します。IGS のカリキュラムは、政治、経済から社会、文化現象まで幅広い学問として設計されています。それは私に、世界の変化を総合的に理解する機会を与えてくれました。また、プログラムでは批判的に物事をとらえ、選定し、疑い、複雑な問題にオープンマインドで取り組むことが求められました。

国際共創学科は理論的な側面だけではなく、体験的なものも多数与えてくれました。国際機関でのインターンシップから、異文化観光の留学プログラムまでも得ることもできます。さらに、IGS での言語学習などは、私の異文化コミュニケーション能力の向上に役立ちました。IGS は英語と日本語の両方で行なっているため、授業で言語能力を伸ばすことだけではなく、異文化間のコミュニケーションについて、より深く理解することができました。これらの様々な能力は、私の学業経験を豊かにしてくれただけではなく、社会人になった後も色々な場面で大いにとても役立っています。

広島大学総合科学部の IGS は、3 つの専攻に分かれていますが、Environment and Society（環境と社会）、Peace and Communication（平和とコミュニケーション）、また、Culture and Tourism（文化と観光）などの多様な分野の学びを、学生に様々なチャンスをもたらす貴重な旅を提供しています。例えば、観光産業におけるダイナミックなキャリアを目指す学生にとっては、とても役立つものになっております。具体的には、Contemporary International Tourism（国際観光の現代的課題）や、Japanese Tourism（日本の観光）という 2 つの授業は、世界の観光地に対する深い洞察をもたらすものです。

Contemporary International Tourism の授業の中では、持続可能性への懸念から、あるいはテクノロジーの影響や現代の国際観光産業における課題が主内容になっています。一方、Japanese Tourism という授業では、日本文化遺産、また、ホスピタリティー、伝統、そして 観光客を引き付けるための戦略といった視点から、日本の観光業界を総合的に検討します。同時に、これらの授業を通じ、今成長しつつある観光業界において、批判的な思考と確実な情報に基づいた意識決定を行う能力を養うことができます。まとめれば、IGS は学生が様々な知識、社会意識、そして社会への責任感を持てるように育成しています。

グローバルなマインドセットを持つグローバル市民になるために私をエンパワーしてくれました。私を支えてくれた学生の仲間たち、教員の方だけではなく、事務の皆様には感謝しております。みなさんの指導、御支援、そして連帯感は私の経験を形作る上で不可欠なものでした。みなさんと一緒に過ごした時間の思い出は、今後も私と共にあり続けます。ご清聴ありがとうございました。

河本氏：コモルシリグン様、どうもありがとうございました。6 人目にご登壇いただきますのは、前延国治様です。どうぞ壇上にお上がりください。前延様は、東広島市副市長兼広島中央環境衛生組合副管理者をしておられます。1980 年度に東広島市役所に入庁され、1980 年から 81 年まで広島県都市計画課へ派遣され、2002 年から 2003 年まで黒瀬町に出向されました。東広島市役所では、生活環境部長、企画振興部長、総務部長を歴任しておられます。それでは前延様、どうぞよろしくお願いいたします。

前延氏：ではみなさん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました東広島市副市長を務めております前延と申します。総合科学部3期生でありますが、私が総合科学部を志望した動機ですが、当時DNAの2重螺旋構造の解明を契機に分子生物学が脚光を浴びていたのですが、唯一総科にだけこの講義が用意されておりました。最先端の学問を、と思い志望しましたが、いざ講義を受けようとしたら希望者が多くて、講義前から出される宿題になかなかついていけず、次のテーマを探すことになりました。でも総科には他にも興味をそそられる分野が数多くあり、有機ポルフィリン環化合物を使った光半導体特性の関係に進むこととなりました。植物の持つ光合成の機能を人間の手で作り出せるとしたら、ということで夢を追い求めたものでございます。

学業から学んだものについては、仮説を立て証明するための実験を計画し、結果を積み重ねつつ、あるべき技術に求められる姿を考察していくことでした。何をするにも、どうあるべきか、何が求められているのか、そこからスタートする考え方は、こうした積み重ねから培われたように思います。総科はデパートのような学び方、提案の仕方に困っても、必ず何らかのヒントを与えてくれる人がいます。誰かに相談すれば何かを得られるというのは、素晴らしい学びの環境だと思います。勉強は苦手、でも何かしなくては、と教授に相談したら、まず有機化学の原書の輪読会をしたら？と勧められ、仲間3人で英語の辞書片手に苦戦したこともありました。懐かしい思い出であります。学生同士でも自由な議論が盛んで、総科生に与えられた地下1階の溜まり場では、学生同士が情報交換や夜のミーティングの事前相談などにもってこいの場所でして、そこでいつも集まっておりました。当時私は通学していたのですが、あまりに友達の家で過ごす時間が多くなり、3年生からは実験もあることから、下宿と通学の2重生活をしておりました。なので、やりたい放題。仲間との話が楽しくて、各々の経験をぶつけ合いながら、その心意気に触発され、また自分が頑張ろうという気になれる、そんな環境に恵まれていたように思います。何かをやりたい、やり遂げたいという学生が多かったように思います。課外活動も活発で、中には劇団を立ち上げるもの、部活に頑張るもの、趣味の写真活動に頑張るもの、様々な学生がいて、まさに個性の集まりでした。そうした活動をしてみて、壁にぶつかること、悩み、相談、その支え合い、一緒にやり遂げた経験などは、どう仲間づくりをするか、また、いかにグループの中の士気を高めるか、非常にいい経験になりました。また、初めて取り組むことへの抵抗感が低く、困った時にはその道に長けた人に知恵や力を借りれば良い、思い悩むよりはやってみて考えよう、という姿勢でいました。何よりも目的の明確化が大事と思うようになり、目標を定めたら1の手、次の手、3の手、様々に考えるあきらめの悪い人間になってしまいました。こうしたチャレンジ精神は、総科生の専売特許であると思います。まさに十八番ではないかと思います。総科生は、様々な経歴、志望を持った学生が集まる多様性のるつぼであり、まさにサラダボウルです。その多様性が触発を生み、違いが新たな発想の起爆剤となって、違いを乗り越えていくことが人間力を鍛えることになると思います。だから、総科に入ったら、やりたいことをやらないと、また、色んな価値観、考えがあっても、話し合えば必ず共有できるものがあると気づかされます。下宿で夜遅くまで議論して、食い違いもあるが賛同できるものを見つけた時、また賛同しあえた時は、本当の仲間を得たようで非常に喜びに変わります。こうした経験は仕事を通じても活きてきまして、仕事をしていてもトラブルはつきものです。避けていたらいつまでたっても終わりません。その原因を突き止め、どこまで歩み寄れるか、また、助け合えるか、目的や大事にするものをどれだけ共有できるかにかかっていると思います。そこのためには、しっかりと聞いて、語って、理解を深め合うことが大切です。最初から嫌いという人はいません。話し合えばきっと分かり合えると思います。そういったことを学ばせていただいたことが私の市役所での仕事にも活きて、また今他にも色んな仕事していますが、そこでも活きています。そういった意味で、総合科学部で育てていただいたおかげで今の私があると思いますし、これからも大学にも、また、社会

にも恩返しをしていきたいと思います。以上で私の話を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

河本氏：前延様、どうもありがとうございました。7 人目にご登壇いただきますのは、村上清貴様です。壇上にお上がりください。村上様は、村上農園代表取締役社長をしておられます。1996 年、O-157 風評被害により主力のカイワレ売り上げが激減した村上農園を、豆苗、ブロッコリー、スプラウトの開発で急成長企業になさいました。2019 年には「EY アントレプレナー・オブ・ザ・イヤー・2019 ジャパン」中国地区代表にも選ばれておられます。それでは村上様、どうぞよろしくお願いいたします。

村上氏：今ご紹介をいただきました村上です。よろしくお願いします。

今ご覧いただいているのは、私が入学した頃の写真です。2 列目の右側で薄いブルーのジャケットを着ているのが私です。それから 45 年が経ちました。私が入学したのは共通一次試験が始まった年です。それまでは 1 期校、2 期校という制度で、国立大学は 2 回受験できたのですが、この年から一発勝負になったので、以前の人たちと比べて、だいぶ毛色の変わった人たちが集まったと思います。この写真の中でも、アフリカで NGO を立ち上げたり、日経新聞初の科学記者になった人とか、メディアに入った人も多く、個性がものすごく強かった気がします。また、この人たちが、現在の私のビジネスも、広告関係で助けてくれたり、新聞社の友達が当社の記事を書いてくれたりとか、おかげで非常に助かりました。

私自身、学生時代は殆ど勉強した記憶がないのですが、良かったのは、山下彰一先生の「開発途上国論」というゼミに入った事です。先生は、日本政府の専門家としてタイ国の経済連関表の指導をされた実務者で、前年に総科に来られ、ゼミ旅行で、東南アジア諸国に連れて行っていただきました。私自身、飛行機乗るのも初めてだし、外国へ行くのも初めての経験で、各地で働かれていた先生のご友人の方々の話を聞く機会をいただき、私自身も世界で仕事をしたい、「世界にはばたけ総科生」ではないですが、海外で仕事をするための就職活動を始めるきっかけになりました。そんな就活をしていたことが、リクルート社の目に留まり、誘われるままに、仕事がキツイことで有名だったリクルートに入社することになりました。入って良かったのは、「自ら機会を作り出し機会によって自らを変えよ」という社訓が浸透していて、社員全員が非常に前向きで、自らチャレンジしていくこと、自律的な考え方、自分の頭で考えることの重要性等々をしっかりと身につけることが出来たことです。また実務的には、法人営業から商品開発、マーケティング、そういった幅広い仕事を、勤続 10 年で普通の人の 30 年分ぐらいの仕事をしたつもりになるくらい、非常に濃い経験をさせてもらいました。そして、この村上農園に入ったのです。私の旧姓は、田村です。広大に入った時に、親族の村上家に挨拶しに行ったら、「うちから通え」と言われて、大学時代は西区にあった村上家から通い、村上農園でアルバイトしていたんです。

当時はちょうど創業間もない頃で、カイワレの需要が非常に強く、会社は急成長していました。農業は衰退しているのに、やり方次第では農業も成長できるのだと強く感じておりまして、その関係で 10 年後に、先代の誘いを受けて村上農園に入ることになったのです。入社 3 年後に、大阪堺の集団食中毒事件で 3 人の小学生が給食を食べて亡くなるという悲惨な出来事が起きました。その原因食材がカイワレだと発表したのが、当時厚生大臣で、後の総理になられた菅直人さんです。それでカイワレ大根が全く売れなくなったのです。これは当時の「週刊読売」のグラビアに「カイワレ業者の寒い夏」というタイトルで出た時の私です。ただ、カイワレもあまり儲かっているとは言えないビジネスだったので、新しい野菜に転換することによって、売上も利益がもっと上がる可能性がある。ピンチをチャンスと捉え、それにチャレンジすることにしました。世界のコロナの患者数をカウントしていたアメリカのジョンズホプキンス大学。特に医学部が有名な大学ですが、そこで開発された「ブロッコリースーパースプラウ

ト」を国内の独占的なライセンス契約を結んで発売することにしました。「スルフォラファン」という機能性成分が癌を予防するという研究成果が多数出ている素晴らしい野菜です。さらに広大とも提携し「ビタミン B12 カイワレ大根」、ビタミン B12 というのは野菜には含まれていない栄養素ですが、教育学部の佐藤教授が開発されて特許になり、それをやはり独占的なライセンス契約で当社が商品化しました。国立大学法人になった広大のこれが第1号の特許ライセンス契約だそうです。さらに、オランダの会社と提携して、マイクロハーブという商品を出しております。右側に立つ男性はオランダのウィレム・アレクサンダー国王とマキシマ王妃。両陛下に立ち会っていただいて東京でライセンス契約を結びました。さらに、台湾の企業とはブロッコリースーパースプラウトのライセンス契約をしておりまして、こちらは生産指導をして、この商品は台湾で一昨年から発売され、順調に拡大をしております。現在売上は、私が入った時の 5 倍、それから O-157 の直後の 10 倍の売上の会社に成長しました。潰れかかった会社でも、一生懸命取り組めば十分に成長する可能性がある。そうした私を育てていただいたのは広島大学総合科学部であり、また、その時の友人に助けてもらって現在の私があります。厳しいから無理、苦しいから駄目ってことはないと思うのです。なんとかしようという姿勢が人生を切り開くと私は信じています。若い皆さんにはいろんな可能性があります。ぜひ総合科学部でしっかりと学び、また、友人たちと交流しながら成功を目指していただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

河本氏：村上様、ありがとうございました。本日 8 人目の登壇者は、坂田桐子先生です。壇上にお上がりください。坂田先生は総合科学部教授で、2024 年度より総合科学科長をしておられます。坂田先生のご専門は社会心理学で、特にリーダーシップと集団、ジェンダーとダイバーシティについて研究・教育しておられます。では坂田先生、よろしくお願いいたします。

坂田氏：みなさん、こんにちは。ただ今御紹介いただきました坂田です。私は、この間ふと気が付いたのですが、1983 年に総合科学部に学部生として入学してから、今年までなんと 41 年間、人生の 3 分の 2 をずっと総合科学部で過ごしてきました。この 41 年の間に学生から教員に代わること

ができまして、今こうしてみなさんにお話をする機会をいただけました。

41 年の間に総科で学んだことは本当に数え切れないくらいあってとても迷ったのですけれども、その中で特に重要だと思っていることを 1 つ選んでお話しします。それは、人々の多様性（ダイバーシティ）を生産的なものにするためのスキルだと思っています。私自身、現在はダイバーシティを自分の研究テーマの 1 つにしているのですが、その興味は、専門性その他さまざまな点で多様性のある「総科」という学部で私が過ごしてきたからこそ培われたのではないかと考えています。

ダイバーシティを生産的なものにするためには、必要なものが 3 つあると考えています。1 つ目は、多様性には価値があると考えて、多様性を歓迎し、楽しむ姿勢を持つことです。この考え方や姿勢を社会心理学用語でダイバーシティ信念といいます。学生時代は正直なところ、自分と視点や価値観が異なる人に対して、興味だけではなくしんどさも感じていたのですけれども、授業や委員会や研究などで、理系・文系問わず様々な先生方と交流するうち、自分にはなかった新しい視点や知識を学べる部分がたくさんありまして、やはり多様性は面白いと心底思うようになりました。特に総科の先生方は、専門性は多様ではあっても、 基本的に総合性・学際性に対して肯定的な方が多いので、その点で目指すところが一致する部分があったことが良かったのかもしれません。

2 点目は、曖昧なものを明確化して言葉で説明するスキルです。心理学の先生方とは阿吽の呼吸で分かり合えることが多分野の先生方には通用しないことがあり、それまでは当たり前と思って説明を省いていたことを、自分の中で明確化して言葉で説明しなければならないことが多々ありました。例えば、20 年ほど前に社会学の先生（もう今はいらっしゃらないのですが）と共同研究し

たのですが、社会学で行なう質問紙調査と心理学分野で行なう質問紙調査はかなり異なる部分がありまして、そこをうまくすり合わせることに時間を要したりしました。相手が自分と異なる知識や考え方を持つことを前提として、言わなくても分かってもらえる関係を目指すのではなく、きちんと言葉で説明すること、これが多様性を生産的なものにするには必須だと思っています。

3 点目は、当たり障りのない会話でやり過ごすのではなく、時には徹底的に突っ込んだ議論をすることです。これは最初のフンク先生のお話の中にもあったと思うのですが、時には激しい論戦になることもあります。しかしできれば相手の気分を害さないように、しかし率直な疑問をしっかりと投げかけることで、100 パーセント分かり合えることはなくても相互の理解が確実に進むという体験を何度もしました。多様性を生産的なものにするためのこの 3 つのスキルを鍛えることができる場や風土が、この総科の中には十分にあったと思います。

なので、若い頃に比べれば多少はそのスキルが向上したと自分では思っていまして、総科以外の他分野の研究者と共同研究する時や授業の時、あるいは一般の方向けに講演とか研修講師としてお話をさせていただく時にも大いに役立っていると自分では思っています。もちろん私だけではなく、総科の先生方はみなさんこのスキルを非常によく備えておられるように思います。これは私が総科で学び、習得した武器の 1 つだと思っています。私の話は以上です。みなさん、ご清聴どうもありがとうございました。

河本氏：坂田先生、ありがとうございました。シンポジウム前半を締めくくる登壇者は、湯淺梨奈様です。湯淺様は 2019 年に中国新聞社に入社され、警察担当や備後本社勤務のほか、広島平和メディアセンターで原爆・平和の話題や G7 サミットの報道などを担当されました。現在は編集センターで記事や写真データを紙面に仕立て、見出しを付けて読者に届けておられます。では湯淺様、どうぞよろしくお願いいたします。

湯淺氏：みなさん、こんにちは。中国新聞の湯淺と申します。私は 2013 年に入学したのでニーゴーと呼ばれる世代です。5 年前に修士課程を終了しました。本日は簡単ではありますが、私の仕事内容や総科時代のどのような経験が今に繋がったかについてお話ししようと思います。

まず、ざっくりですが仕事についてです。私は記者として自分の担当地域や分野で日々起こった出来事を取材し、記事で発信しています。昨年までは原爆、平和報道担当として、被爆者の体験や海外の方々の核兵器に対する考え方などを取り上げていました。現在はそういった色んな記者達の色んな記事に見出しを付けて、読者にとってニュースの価値判断が分かるように紙面をレイアウトしています。

さて、私が 6 年間の大学生活で学んだことですが、本当に数えきれません。でも、あえて一番自分に役に立ったということを挙げれば、それは総科時代に多くの先生や友人、そして地域の方々と出会ったということです。その出会いによって、数多くの挑戦をすることになりました。

初めに正直にお話しすると、私はきらきらな大学生活にあこがれて入学していました。しかし、わくわくしていたのも束の間、初めての独り暮らしや想像以上の田舎町、今より酷かったんですけど、に戸惑い、不安が大きく、いつの間にか誰にも会いたくなくなるほど気持ちがふさぎ込んでいたんです。そんな中、転機が訪れました。当時総科に、飛翔という雑誌があったんですが、今もあると思いますが、偶然その編集に携わることになったんです。教授をインタビューしようというテーマで、私は熱帯地域の森林の研究している先生にお話を伺うことになりました。先生はとても気さくで、それまで私が抱いていた教授という堅苦しいイメージを払拭してくれました。そして先生は、今度理学部の学生とマレーシアの調査に行くんだ、とおっしゃってました。その話を聞いて、いいなあ、何か楽しそう、羨ましいな、と思ってると、何と先生が君達も一緒に行くかい？　といってくださったんです。当時マレーシアの調査は理学部の授業、そして 2 年生以降から単位が取れるものでした。当時 1 年生だった私は、他学部だし単位は取れないけど行ってみたい、と思って参

加を決めました。実際にマレーシアに1週間ほど訪れました。現地の学生と交流しながら、ジャングルに入って巨大なアリや虫を見て悲鳴を上げたり、ドリアンを食べたり、とにかく刺激たっぷりの時間を過ごしました。ちゃんと真面目な勉強もしましたよ。ちなみにこちらは学部長の山田先生です。当時、先生もマレーシアに一緒に学生を引率されていました。こういったことがきっかけで、私はいつの間にか落ち込んでいた気持ちが明るくなっていたんです。自分の知らない人と出会って、知らない新しい景色を見て、1歩踏み出すということが楽しいと感じたんです。

その後の大学生活は出会いと挑戦をモットーにしました。例えば、東広島で地域の方々と一緒に地域おこしに携わりました。また、東日本大震災で被災した宮城や福島を度々訪れて、現地の人と交流しました。院生時代には土砂災害について研究し、被災者の体験を聞き取って本にまとめたりする作業にも携わりました。ほかにも色んな国や地域に訪れました。これらの体験は、私が自力で築いたのではありません。総科の友人や先生、そして地域の方々が、他の人を紹介してくださったり、情報提供してくださったことで、結果的に幅広い経験に繋がったんです。

現場の空気に触れて、現地の方々と交流したこと。今振り返ると、これは今の私の生き方や仕事に繋がっていると思います。記者は自分で地域を訪ね歩いて、人と繋がって、そこでどんなことが起きているのか掘り起こすことが大切だからです。でも勿論うまくいくことばかりではありません。失敗もあります。でも1歩踏み出すということで得られる感動の方が大きいです。

学生時代に過ごす時間は財産になります。特に総合科学部では、色々な分野の学びが得られ、色んな人が集まります。今日私がお話ししたのはほんの一例ですが、みなさんもぜひ知らない世界に触れて、楽しいと思ったらチャレンジしてみてください。レポートや試験課題など、夜な夜な泣きそうになることもあると思います。でもいつの間にか全部がいい経験になります。これで私の話は終わります。御清聴ありがとうございました。

河本氏：湯淺様、ありがとうございました。ここで10分間の休憩とさせていただきます。10分後に、第2部総合討論「ひろだいそうかの50年　現代世界と総合科学の可能性」と題し討論を行ってまいりたいと思いますので、お時間までにお席にお戻りください。

（10分間の休憩）

河本氏：それでは定刻になりましたので、第2部総合討論「ひろだいそうかの 50 年　現代世界と総合科学の可能性」と題し討論を行ってまいりたいと思います。なお、総合討論の司会は青木先生にお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

青木氏：第2部、総合討論、ひろだいそうかの50年、現代世界と総合科学の可能性、の司会を務めます青木と申します。どうぞよろしくお願いいたします。まず、9人のスピーカーの皆様、大変興味深い、面白い話、ありがとうございました。ここからは、第1部でご登壇いただきました9名の方々とともに討論を行ってまいりたいと思います。

このシンポジウムに先立ちまして、総合科学部の1年生に、登壇者に対する質問を事前に募っております。本日も1年生が必修の授業の一環としてこのシンポジウムに参加をしております。そこで、討論の取っかかりとしまして、学生からの質問を踏まえまして、初めに登壇者の皆様に総合科学部で学ぶことの意義、あるいは重要性について、先ほど前半の5分のスピーチの中では話すことのできなかったことなどを補足していただければと思います。その際、例えば実際の仕事の中で、総科で学んだことがこのように活きた、あるいは工学部、あるいは経済学部、文学部など、いわゆる専門的な学部を卒業した同僚、仲間との違いを感じたなど、もしできましたら実例を挙げながら具体的なお話をいただければと思います。

総合科学部に入ってくる学生、ここにも多くの学生がいるかと思うんですけども、その学生の中には、他学部と比較をして、総科では広く浅く学ぶだけで終わってしまい、専門性が身に付かない

のではないか、あるいは、将来就職をする際に総科で学ぶということが不利になるのではないか、こういった不安をもっている学生も多くいるかと思います。今回寄せられました１年生からの質問にも、こうした点について登壇者のお話をお聞きしたいという意見がございました。こうした学生に向けまして、総科で学ぶことが将来どのように活きてくるのか、その辺りを、具体的なご経験を踏まえまして学生にお伝えいただければと考えております。この点に関しましては、教員以外の実務経験のある方々にお伺いすることが適当かと思います。では１部の登壇順にお願いします。まず井手さん、いかがでしょうか？

井手氏：ありがとうございます。本当に今日の講演の中で色んな話が出たんですけれども、私の経験から申し上げますと、新聞記者、あるいはジャーナリストにとって大切な要素として３つの要素があるといわれています。１つは取材力、もう１つが文章力、そして３つ目に企画力といわれています。取材力と文章力は何となく分かると思うんですけど、この企画力っていうのはなかなか表現が難しい力です。私の理解では多様な視点、あるいは独創的な視点から物事を捉え、それを表現する力だと思っております。その意味で、総合科学部で学んだ４年間というのは、まさにこの多様な視点を身につけるための幅広い知識、あるいは経験を積むことの大切さを学ぶことができたと思います。みなさんも、今青木先生の話の中で出た、「専門性が身に付かない不安」を抱えていらっしゃる方もいると思います。ただ、社会に出てみると、大学４年間で得られる専門性っていうのは多分入り口でしかなくて、それがすぐ社会で役に立つというものでもないことがわかります。それ以上にさまざまなことを知り、経験し、多様な視点を持つ人材の方が、私はジャーナリスト、ジャ

ーナリズムに限らず、大きな可能性を開いていくものだと思っております。以上です。

青木氏：ありがとうございます。続きまして石橋さん、いかがでしょうか？

石橋氏：総科は他の学部に比べると広く浅く様々なことを学ぶので専門性が身につくのだろうかとか、ちゃんと就職できるんだろうかと、１年生のみなさんが思われるお気持ちはすごくよく分かります。その上で思うのですが、大学に入るまでは受験勉強をし、大学３年生からは就活をするとなると、大学で勉強できる時間は限られてしまいます。受験勉強はいかに正解を出していくかという勉強をするわけですが、社会に出ると実際には答えのないことの方が多い。それこそ今、人工知能（ＡＩ）の普及で、人間がしなくてもいい仕事が凄く増えている。そういった中で、他の人と差別化を図るものは、人間力だったり経験の力だったりするのです。自分が逆に人を採用する立場だったらどういう人を採用したいんだろうかと考えると、個々人の魅力になると思います。今、ネットで検索すればすぐに答えが出てくる時代の中で、自分が本当はどうしたいのかと自分自身に問い、その時その時にしたいことを体験し尽くして、自分の中から湧き上がるもので掴み取っていく必要があると思っていて、様々なことにチャレンジしたり経験ができる環境が整っている総科はいい学部だと思います。

青木氏：ありがとうございます。続きまして、コモルシリグンさん、いかがでしょうか？

コモルシリグン氏：私にとっては、総合科学部の中で実際どんなことを学んでるか、卒業した後どんな就職ができるか、ずっと聞かれるんですけど、

他の学部に比べて専門的な学部ではなく、色々多様なことになれる学部だと思ってます。そこの強みは適応性、もしみなさんが考えてみたら、この4年間は世界はどんなところだったのか考えてみてください。今に比べてどういう世界なのか。なので、あまり予想できない世界の中にどういうことを準備すればいいのかは、総合科学部ですごい学べたことじゃないかなと思いました。なので、他のすごく特定のスキルを学べる学部より、総科の方がすごく役に立つのではないかなと私はすごく思ってます。

青木氏：引き続き前延さんお願いします。

前延氏：先程の井手さんの話にも通じるんですが、総科生は幅広いジャンルを勉強しています。ですから色んな専門家の方に話を聞く時に、ある程度素養があるわけですから話をしっかり聞ける、それを受け止められる、という強みがあると思います。私の場合、市役所で人の採用も色々と関わってますけども、市役所の人材育成方針を作る際に何を大事にするかというと、専門性と汎用性、いわゆるエキスパートを作ると同時にジェネラリストを育成するという両方を視野に入れて育成しています。なぜかというと、色んなジャンルを、特に市役所の範囲は広いですから、どこでも働けて、でもそこに共通するスキルが必要になります。そこは経験を積むことによってしか培えないものもありますので、そういった意味では両方必要になります。そして何よりも大事にするのは、面接の時なんか必ず聞くんですけども、本人がどう考えて何を学んできたのか、そこを必ず聞きます。その姿勢の方がむしろ大事です。何を学んだかではなくて、何を学ぼうとして何をしたか、そしてそれで何を得たか、です。そういうチャレンジ精神を持った人間は、どこでもやってくれますし、くじけない、そしてやり遂げてくれます。そういった意味で、総合力を期待してその人見るようにしています。そういった意味では、村上社長のほうは専門家ではないかと思いますが。

青木氏：村上さん、お願いします。

村上氏：私自身が最初に就職したリクルートや今の村上農園の仕事は、専門の学問分野っていうのは多分ありません。こうした仕事っていうのは世の中に沢山あって、逆に専門性だけで成り立っている仕事は、今はかなり少なくなっていると思うのです。だから社会で重要なことは、考えられる力。「本当にそうなのか‥？」と思えること。だから先生が言う通りではなく、とにかく自分で考える。自分で考えて自分なりの答えを見出すということが重要で、教えられて覚えるという高校と同じようなことをしては駄目だと思うのです。自分で考える、それを先生にぶつけてみる、「自分はこう考える」ということを持つことが大学生にとって最も重要なことで、それが社会に出て一番役に立つと思うのです。お利口さんにならずに、「偉い人がこう言ってます」とか、「本にはこう書いてあります」とかではなく、「自分はこう思う」ということを大学では身につけなければならない。それが世の中に役に立つし、その人の将来につながるのではないかなと思います。

青木氏：ありがとうございます。最後に湯淺さん、お願いします。

湯淺氏：まだ社会に入って 6 年目なんですけど、社会人になってからこそ総合科学の力が求められてくる、活きてくると感じています。今の人手不足の中で、予期せぬ仕事を振られることもあります。1 つの分野よりもマルチタスクにこなせる人材の方が、必要とされることが多いかもしれません。

実際に私の記者としての仕事で言えば、例えば、ある日は海の生態系のことを取材しないといけない。と思ったら、次の日は地元のスポーツで活躍した人を取材する。と思ったら、その次に核兵器の専門家に取材をする。そのような感じで記事で発信します。自分の知らない分野のことをやっていかないといけないんですけど、総合科学部でも必ず自分の専門分野以外の科目を取らないといけないじゃないですか。そういったところで、苦手なことでも対応していく力っていうのが、総科だからこそ培われるのかなと思ってます。

青木氏：ありがとうございます。今こちらにいる 1 年生のみなさんにも大変参考になる貴重なお話かと思いました。次に 1 年生から質問があったのは、総合科学部は、もともと総合科学という学問があるわけではないんですけども、その総合科学というものからできてる学部ということで、総合科学とは一体何だ、というそもそもの根本的な問い、総合科学をどのように考えているのか、登壇者の皆様に聞きたいという質問がありました。先程言いましたように、総合科学という既成の学問があるわけではありませんし、私たち総合科学部で教育研究に携わっている教員たちも、それぞれ総合科学をどのように捉えているかについては、大きな相違があるだろうと思います。そこで、この総合科学とは何か、という点につきましては、今日 3 名の教員が参加しておりますので、その教員たちにお伺いしたいと思います。その際に、この第 2 部のテーマは、総合科学の可能性、あるいは総合科学部の未来がテーマとなっていますので、そのあたりも若干見据えてお話をいただければと思います。まずフンクさんから、いかがでしょう？

フンク氏：少し抽象的な話になるかもしれませんけど、総合科学と一言でいっても、実は 3 つの段階があると思います。1 つ目は、自分の学問以外の様々な学問と分野を知ることです。1 年生のみなさん、2 年生に上がったら総合科学部共通科目、Multi Disciplinary Subjects がありますが、それがそのための科目です。どれだけ色んな学問があって、アプローチがあって、方法が違うのかを Multi Disciplinary で学びます。それを学んだ上で、次の段階で複数の背景とか学問の知識、コンセプトとか方法を組み合わせて、1 つの課題や問題について考えます。それこそ総合科学というか、Interdisciplinary Research になります。総合科学部に学生独自プロジェクトというのもありますし、教員のための総合科学プロジェクトもありますが、それはこういう Interdisciplinary なことを考えています。例えば、広島大学の看板である平和研究、あるいは私の専門である観光学、そういうものは大体 1 つのテーマについて複数の視点、方法で研究する、学ぶ、Interdisciplinary なものです。そして将来のことも考えてくださいということでしたけど、次の段階は英語で Transdisciplinary といいます。それこそ先ほど言った越境になります。それは何かというと、例えば、私達は大学の中、学問の中で研究するけど、そこは実用的な、応用的な研究、大学以外の、大学も社会の一部ですけど、社会と繋げる、現場と

繋げる、あるいは全く新しい考えを見つけることです。今東広島市も広島大学も課題にしている持続可能性、サステナビリティは、 多分その Transdisciplinary Research を必要とするものだと思います。これはまだ達成できたとはとてもいえないので、これからみなさん、挑戦していただきたい第 3 の段階だと思います。

青木氏：ありがとうございます。じゃあ片山さん、いかがでしょうか？

片山氏：総合科学とは何かっていうことなんですけど、これっていう答えが 1 つに決まっているわけではなくて、1 人 1 人に総合科学とは何かっていう答えがあると思っていて。

私は総合科学部に入学して今年で 10 年目で、その間にも色々考え方が変わってきたんですけど、今自分なりに思っている総合科学とは何かっていうことについて語らせてもらおうと思います。私は研究する上でワクワクする気持ちっていうのを一番大切に思っています。このワクワクっていう気持ちは全ての学問の始まりだと思っていて、総合科学は、そのワクワクっていう気持ちを基盤として、その知的好奇心に素直に自分が従って、1 つの分野に縛られることなく、分野の垣根を越えてその気持ちを探求することだと私は思っています。この気持ちの持ちようが総合科学だと思います。また、色々なことを基礎に立ちかえって考えてみると、分野ごとに表現の違いとかはあると思うんですけど、根本的な、本質的な考え方っていうのは共通点があったりします。そのエッセンスを吸収することで、既存の分野では出てこないような新しい発見ができたりとか、もっと深い理解ができたり、新しいアプローチを見つけられたりできると思います。それが総合科学の一番の魅力だと思います。つまり、自分のワクワクする気持ちっていう知的好奇心を芯として柔軟に学ぶこと、それこそが総合科学の精神だと思います。現代は複雑な課題が多く存在していて、従来の枠組みに囚われないような解決が必要で、そこでは一番総合科学の精神が必要になってくると思います。今みなさんがおっしゃってくださったように、学問だけでなく、実生活においてもこの総合科学の精神は非常に大切だと思っています。未来のことというと、私も総合科学部の教員として、この 50 年間続いてきた総合科学の精神を絶やすことなく次の世代へと続けていければなと思っています。総合科学部が、自分のワクワクを芯に持ちながら、他者や他分野の視点を柔軟に学べる学生を育成する場であればなと願っています。

青木氏：ありがとうございます。最後に坂田さん、お願いします。

坂田氏：「総合科学」って、総合科学そのものを目的にして「総合科学をやるぞ」と言ってやるものではなく、何かの課題の解決を本気で目指そうと思って取り組んだ時に、必然的に必要になるものだと思っています。その課題というのは、勿論社会的な課題もそうですし、あるいは 1 つの専門分野の中の学術的な課題もそうだと思うんです。そういう課題の解決を本当に目指したいと思った時に、どうしても総合科学というものが必要になってくる、と私は思っています。

この「総合科学」には、先程フンク先生が仰ったことと重なる部分があるのですが、色々なタイプがあると思っています。例えば、昔佐藤学部長が仰った「1 人総合科学」、つまり「1 人の専門家が何かの課題を解決しようと思った時に、他の分野の知識が必要になって、その 1 人の専門家が様々な専門分野の知識を勉強して身に付けていく」という形のものもあれば、「複数の様々な分野の専門家が寄り集まって、チームとして 1 つの課

題に取り組んでいく」という Interdisciplinary の形のものもあります。大きく分けるとこの２つがあると思います。

これからの総合科学部がどうあるべきかを、フンク先生と少し違う視点で考えますと、総合科学が必要だというところまでは総科の人であれば十分に分かっていると思うのですが、ではどうやればその総合科学を生産的なものにしていけるのか、成功させることができるのかという方法論の部分については、実はまだ体系化されていないと思っています。「1 人総合科学」であれ、Interdisciplinary な形の総合科学であれ、どういう点に気を付けて、どのように取り組んでいけばその取り組みが成功するのかという部分を、できれば今後は体系化して、皆さんにお伝えできる形にしていくことに取り組めたらいいのではないかと個人的には思っております。以上です。

青木氏：ありがとうございます。それぞれ考える総合科学ってかなり違うかなということかと思います。こちらに今日登壇していただいている方々は、分野としては企業の方、それから行政、それからジャーナリズム、それから研究者と、ざっくり大きく分けるとそうなると思いますけれども、それぞれ違う分野で仕事をされていて、今総合科学部で学んだことについてそれぞれのご経験を語っていただいたわけです。ここでお互いに何か、この話を聞いて、ここをもう少し聞いてみたいとか、あるいは違う仕事なんだけどこの辺が共通してる、あるいはこの辺は違うよね、とかそういうような話があれば少しの登壇者のみなさんの中で討論していただきたいと思います。どなたかもしよろしければきっかけを作っていただけますか。

フンク氏: では少しだけ聞きますけど、外国から日本に来ると、日本の場合は大学を出てどの専門をやっても企業で色んな仕事するという傾向があるので、誰でも総合科学をやるんじゃないかなという気もするんです。その中でも特に企業にいらっしゃる方、例えば村上さんに聞きたいのですが、来る人材に対して、そういう総合性はどういうふうに、やはり特定の専門分野にいた人とそうでない人で違うとか、どういうふうにその企業の中で総合性を育てるのか、ということについて興味があります。

村上氏：今私がやってる村上農園って会社でいうと、特に発芽野菜の分野なので、そのことについて専門的にやってる人っていうのは、まず大学の中でもすごく限られていて。もしそれをやってたとしても、その実験が正しいのかどうか、あるいは普通に生産していく上で役に立つかどうかっていうのは、一部役に立つけどそれは完全なものではないっていうことがありまして。逆に農学を勉強したりしていると自分が分かった気になって、あるいは先輩が言ってたことをそのまま鵜呑みにして、本当に基礎的なことでやらなければいけないことにチャレンジしない。これはあまり教えられることに慣れてしまうとそういった傾向が非常に強くなって、自分の頭で考えることをしないことになるのではないかと。農学部なんか出てると、いかにも勉強したようなんですけど、実はほとんど何も分かってないし現実を見ていない、現物を見ていない、そういう人が非常に多くて。これは別に多分日本の場合はメンバーシップ型の体制なんで、ジョブ型って言われてるような大学の延長線上に仕事がそのままあるタイプではなくて、そこの会社に入ってそこから、周りから色んなことを学び、それで１つずつステップアップしていくっていうようなスタイルが一般的かと。

ですから比較的専門性のあるメーカーの場合は多少違うかもしれませんが、大半の人たちはそうじゃないと思うんです。だから先程私も申し上げたように考える力が非常に重要で、それも柔軟に考える力が必要で、柔軟に考えようとすると色んな知識がないとそれは答えに近付けない。それを特定の凝り固まった考え方では駄目で、柔らかい考える力っていうのが社会で一番求められているのではないかなと。そういった意味で総合科学部で学んでる人たちにとってはその可能性が非常にあると思っています。そういう柔軟な考え方を色んな先生方から学ぶということは、極めて現代社会において重要な学びをしてるんじゃないかなって思います。

青木氏：他の方はいかがでしょうか？　井手さん。

井手氏：関連する話なんですけれども、私新聞記者生活のかなりの部分を司法記者、裁判所周りを中心にやってきました。けれども、実は法律学の専門的な勉強って学生時代全くしてないんですよね。全て記者になってから、さまざまな取材等を通じて勉強して仕事をしてきたんです。よく「法学部出身ですか？」って聞かれました。でも

全然してないんですよ。逆に社内で、「私法学部出身なので、ぜひ司法の取材したいんです」っていう人に限ってあまり使えない。それは、さっきの村上さんの話じゃないですけど、理論に凝り固まっちゃっているケースが少なくないからです。われわれが裁判を記事にする事件や紛争は現実の世の中の動きや生活に密着した話ばかりです。本の中や理論の中だけで動いていることってほとんどないわけです。もちろん法律知識や理論を知っているにこしたことはないんですけれども、裁判実務も社会の実情に応じて変わっていくことも少なくない。そういう意味では、私は総合科学部で色んなことを学べたのは本当にありがたかった。

先程プログラミングの話もしましたけど、フォートランという、今でも使われているのでしょうか、それをやらされて泣きながらリポート書いたのを覚えていますけれども、そういうことも後にすごく仕事に役に立った経験があるわけです。そんな柔軟な学びの場にみなさん来ている訳ですから、これは本当にラッキーだなとも思います。

青木氏：前延さん、お願いします。

前延氏：私からは、総合科学で学びといっても、専門性が、というのは色々みなさんご指摘の通りだと思います。行政の場合でも、行政そのものが大きなサービス業ですから、あらゆることをしていく必要があるし、市民のニーズに応えるためにも、法律がこうだから、という答えだけでは、まさに何のために仕事をしてるのか。法律はこうあっても、制度がこうあっても、国がこういっても、市民のニーズに応えるためにはどうすべきなのか、そこに知恵を出すのが求められてくる。そういった意味ではしっかり聞いて、ニーズが本当にどこにあるのか、そのためには何をすべきなのか、あるツールをどう使えばいいのか、というまさに複合作業をする必要が出てくる。そのためには多様な考え方を受け入れることができて、聞くことができて、それを消化してアイデアを出せることが、まさに行政マンの力が問われてくるところです。そういった意味では、総合科学部のような色んな方面に知識の素養があって、なおかつチャレンジ精神が強いというのは、まさにそういう行政が求める能力には素晴らしいものだと思います。ある意味ではそういうチャレンジ精神を持って、そして何をすべきなのか、目標をしっかり持って知恵を出していく。法律っていうのは使い方で如何様にもなりますから、そこらも幅を持った中で何が最適なのか、そこを見つけ出して、そして市民の幸せのために最大値を見つけていくっていうのはわれわれの作業ですから、総合科学の力はそういうとこでも活きてくると思います。以上です。

青木氏：他の方からは？　お願いします。

コモルシリグン氏：すいません、先程あまり詳しく説明してなかったんですけど、私が現在就職している先は、外資系のベンチャー企業なんです。そういう会社では国際環境が形になっていて、そういう総合性が凄くオフィス用になっていて、総合科学部でこういう適応性という部分を学んでなかったらうまくいけなかったかなと思ってます。総合科学部だけではないのですけど、私は IGS の 1 期生で、入学してきたばかりの時に、12 か国くらいかな、今現在はもっと増えてきたのですけど、そのような異文化間の環境の中で学んできたので、今ではグローバル市民として就職するのは意外と簡単かもしれないと思ったんですけど。なので、そこは総合科学部だけじゃなくて、IGS の強みではないかなと思ってます。

青木氏：ありがとうございます。湯淺さん、お願いします。

湯淺氏：うまくいえるか分からないのですが、今みなさんのお話を伺いながら思ったことです。自分の専門分野 1 つだけ勉強して社会に出た時に、例えば記者でいうと、私は土砂災害のことを研究していたんですが、もしそれで今土砂災害の専門としてジャーナリストをしていたら、専門的な視点がない読者の方々にちゃんと伝わる記事が書けないかもしれないな、って思いました。敢えて違う分野のことをするからこそ、私も真っ白なところから勉強して伝えるから相手によりうまく伝えられる。専門家が難しいことを言うよりも、「私も元々は知らないけど取材してこうだったよ」っていうふうに、噛み砕いた言葉で伝える方が、聞いてくれる側の方ももっと素直に受け止めてくれるかなって思いました。

青木氏：ありがとうございます。石橋さん、どうですか？　まちづくりって行政の一環みたいなところがあるんですか？　どうでしょうか？

石橋氏：私の場合は行政からの委託でまちづくりをさせていただいています。当初は、行政から求められるものに対して結果を出さないといけないという思いばかりが先行し、地域の方や現状が見えない中でがむしゃらに突っ走ってしまって、人間関係がギクシャクした数年間があったんです。今日もみなさんおっしゃっていましたが、柔軟に考える力だったり、全ての仕事が目の前の人がいて、その先に仕事があるので、その方々と向き合って、何を考えていらっしゃってどうされたいのかを推察する力が必要だと思います。目の前の方がどうしたいのか、地域がどうしたいのかという視点で仕事を動かすことの大切さや、そのことによって喜んでいただけたときには自分も充実感で満たされるし、結果的に行政の方にもよくやってくれたといっていただけたりもするので、そういうところが大切なんじゃないかなと思っています。

青木氏：ありがとうございます。先程も言いましたように、ここには企業、行政、それからマスコミ、それから大学の教員がいます。ここ何年も産官学の連携ということが言われてきて、東広島市もスマートシティ構想などを掲げて、広島大学、その他企業と一緒にまちづくりを進めていると思うのですが、どうでしょうか？　その辺の産官学といいますか、研究者と企業、それから行政、それらの関係、マスコミはそれをどういうふうに見てるのか。そのあたりについて、総合科学部の卒業生の方々に、産官学で考えることがもしおありだったら一言いただきたいんですけど、前延さん、お願いします。

前延氏：産官学、今特に東広島でやっていることですが、タウンガウンという組織を作っております。アリゾナ州立大学で取り組みが進んでいるのを見て、それを広島大学も自らアカデミックエンタープライズとして取り組みを進められています。それに東広島市の方も賛同して一緒に取り組みを進めてまして、そこの Town & Gown Office の、私も位置付けの中に入っているわけですが、狙いは、スライド（次ページ）もあるのですが、できれば用意していただいて、大学の知見を 地域の課題解決にどう活かすかということで、行政から大学でこういうことについて何か解決の方法はありませんか？という情報提供させていただいて、 それに対して大学からこれなら私はこういうことができますよ、というお知恵をいただいて、それをもって、市からお願いして研究していただいたり、それを具体化していただいて、将来的には市の事業、もしくは大学と市の共同事業という形に転換して、地域がそれを受けて課題が解決していくと、こういう流れを作ろうとして今動いてます。今 3 年目ぐらいになりますけども、元々は先程紹介したようにアリゾナ州立大学の取り組みを真似て広島大学が動き出したことによって、市もそれに賛同して動きました。この動きは近畿大学や広島国際大学にも波及しております。3 つの大学とそういう提携をして、3 つ揃って動き始めておりますので、こういう動きが、この後にもスライドが何枚かありますが、流していただければいいと思いますが、大学の先生がそれにどういう提案を出してきたかというのも後ろに付いてますので、こういう、これ田中先生です。フンク先生も御存じだと思いますが。それから次、もう 1 つあるんです。藤原先生の交通シュミレーターの関係とか、まさにこういうものを、まさに藤原先生の関係なんかは私の担当の領域でもありますから、一緒に研究調査することによって国の支援を得たりということもあって、まさに市民の課題が大学の力を借りて行政も解決に向かうと、こういう取り組みが実際今動いておりますので、これがどんどん花開いて成果が生まれることに期待して、今進めております。参考までにということで。

青木氏：ありがとうございます。この取り組みで総科の先生が関わっているものはあるのでしょうか？

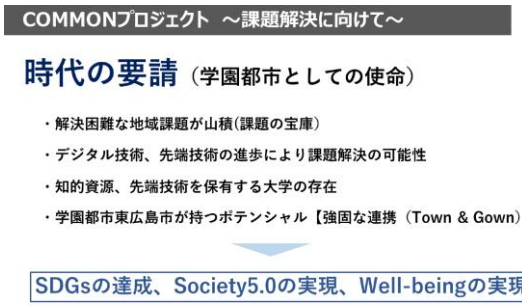
前延氏：事例はあります。今日はないですが、過去には入ってらっしゃいます。今まだ続いて動いてますので。

青木氏：坂田さんは、これダイバーシティかなんかの関係で関係されてるんでしょうか？

坂田氏：これには関係していないです。ダイバーシティ研究センターの方の取り組みには関わっていますが。

青木氏：具体的にどういう取り組みなのかお話しいただけますか？

坂田氏：広島大学でダイバーシティ研究環境を作る取り組みが行われています。近隣の企業、広島



スライド（拡大表示は PDF 版で）

県や市町、あるいは他大学などが一緒になって女性研究者の研究環境を改善し、女性の活躍をもっと推進することに取り組んでいます。特に私が関わったことで言えば、実力があるかもしれないのに女性がなかなか管理職になりたがらず、女性の昇進意欲が低いままになっているのがなぜなのか分からないという、企業さんに共通の悩みがあったので、その点に関して調査をさせていただきました。私の専門である社会心理学的な観点から、企業さんとの共同研究という形でその調査をさせていただき、幾つか改善のための提言をしました。企業さんにはその提言を踏まえて色々な取り組みをしていただきました。

青木氏：ありがとうございます。企業と行政、あるいは大学研究者との関係、多分そういうところに総合科学みたいなものは非常に意味を持つんだろうと思うのですけど、何かその辺りで御意見のある方がもしいればお願いします。

井手氏：直接総合科学という形ではないのですが。今私は広島ホームテレビというローカル局にいますが、ローカルのテレビ局の役割の１つとして、やはり地域の課題解決をしていこう、そういう役

割を果たしていこうということを経営計画の中に入れています。その手段として、実は今週発表したばかりなのですが、広島駅に
ドッツ、これは DoTS、「Design of Terminal Setouchi」の頭文字を取ったものですけれども、要は地域の課題を解決していく場となるリアルメディアです。われわれはテレビというメディア、あるいはデジタルというメディアを持っていますが、実際に生で人と触れ合い、行政の人たち、あるいは企業の人たちと語り合い、課題解決につなげていく。そういう場を作ろうということで、今建設中の広島駅ビルに新たな施設を来春オープンさせます。色々な事業をやるんですけれども、中核となる事業の一つとしてプロモーション事業があります。つまり自分たちの自治体の魅力、あるいは価値を訴え、世の中に出していくためには、知識とスキルを持った人材が必要です。そういう人材を育てていく場にもしますよ、ということで、谷口千春さんっていう、調べていただいたら色んなところに出てくる素晴らしい起業家・クリエイターなんですけれども、その方を社長に、あと広大でなくて申し訳ないのですが、社外取締役で叡啓大学の早田先生を迎えて、まさに産官学が広島、あるいは瀬戸内エリアという地域の課題を解決する場を作っていこうというプロジェクトを今ちょうどスタートさせたばかりです。

青木氏：ありがとうございます。何かみなさんから他にございますでしょうか？

（フロアからのコメント２つ：省略）

青木氏：時間も迫ってきましたが、学生のほうから何か質問があればぜひ出していただきたいと思いますが、いかがでしょうか？　あるいは、総合科学部にこうしてほしいというような、今学部長もここに来ておりますし、ぜひそういった総合科学部に対する思いを出していただければと思いますが、いかがでしょうか？

村上氏：今平均寿命がどんどん伸びていますよね。年金問題が取り沙汰されており、当社の若い社員にいつも言っているのは、「皆さんは定年という考え方は捨てた方がいい。生涯他人の役に立つために何をするかということを考えて、お金をもらってももらわなくても、自分の存在価値を明らかにするために、健康であれば少なくとも 80 歳まで働け」ということです。みなさんで言えば、これから 60 年働く。その時は大学時代に学んだようなことはほぼ役に立たない。時代が変わって、世の中は変化していく。だからそのためにもみなさん１人ひとりがずっと学び続ける、考え続ける、そのことを通してみなさんが成長していって周りを幸せにする。政府がなんとかしてくれる‥そんな事を言ってたら、駄目になりますよ。

いかに１人１人が世の中の役に立つか、それを考えていく。そういった生き方をぜひ後輩のみなさんには目指してほしいというのが私の気持ちです。頑張ってぜひ世の中を良くしていっていただきたいと思います。

青木氏：ありがとうございます。後輩の学生達に、こういうふうに今後生きていってほしいというもしアドバイスがあれば、どなたからでも結構ですが、いかがでしょうか？　湯淺さん、お願いします。

湯淺氏：今日学生の方々がたくさんいらっしゃるのでお伝えしたいことです。今日登壇者の中で結構な人たちが「挑戦することが大事」と言っていたと思います。でも、そもそもやりたいことがなかったり、挑戦って何？ってなったり、ハードルが高いかな、って思っておりまして。私が学生の時は、挑戦という言葉よりも、「人に巻き込まれる勇気」の方が自分の中ではしっくりきます。もし自分がやりたいことが何もなかったら、人に誘われたことをやってみるのがいいいです。今日私は『飛翔』の編集をしたと言いましたが、最初から自分がやりたかったわけではなかったんです、本当は。でも先輩に誘ってもらってやってみて、そこから次に、初めて、自分はこっちをやってみたい、とか見えてきたので、人に巻き込まれてみるっていうのを是非学生時代にやってみたらいいかなと思います。

青木氏：ありがとうございます。じゃあ前延さん、お願いします。

前延氏：巻き込まれるという言葉で思い出したんですが、私は元々市役所に入りたくて入ったんじゃないんです。農家の長男で本当は民間に行きたかったんですが、親に説得されて仕方なく市役所に入りました。でも入ってみて、やってみて、そして人の役に立ってみて初めてやりがいを感じて、そこの中に目標を定めて、仕事を、成果を出して、そして人の役に立ってこそ人が頼ってくれ

る。そして市役所に入ったからには、と決めたのが、人から頼まれたら断わらない。22 歳で役所へ入ってしばらくしてその決意をしましたから、それをずっと 40 数年続けてます。ですから、よほどのことがあれば別ですけど、人から頼まれたことは何であっても自分のこととして受け入れて、一緒に考えて、一緒に苦労する、それが自分を育ててくれる。だからそこは感謝だと思います。問題を持ってこられたから迷惑だ、と思うんじゃなくて、自分にチャンスをもらったと思えば、一緒に悩めば、必ずそれは自分にも成果があるし、相手の役にも立ちます。一緒に悩んで苦労した友達っていうのは一生続きますし、何かあったら一緒になって手伝ってくれます。そういう仲間づくりを一緒にした方が、一生続けた方が、自分の生涯、人生は生きたものになると思いますので、ぜひやってみてください。以上です。

青木氏：ありがとうございます。コモルシリグンさん、お願いします。

コモルシリグン氏：これは学生にすごく伝えたかったことなんですけど、私は入学したばかりの時に、フンク先生に、当たり前ということは何 1 つ当たり前ではないって教えてもらいました。総合科学部はそういう学部です。現在自分は何をやってるのか、こういう学部に入学して絶対こういうふうになる、当たり前ということはそっちのほうが強いと思うかもしれないのですけど、結局この世界の中に当たり前ということはなくて、そういう余裕のある適応性が伸ばせる総合科学部がよいと思っております。

青木氏：順番で来てるようで、石橋さん、何か一言ありますか？

石橋氏：今日ここにいらっしゃる福田先生や長坂先生、学生さんたちに、2016 年以降 4 回にわたって、匹見町へ調査実習にお越しいただきました。

若いみなさんが匹見に来てくださるというだけで、地域のみなさんが元気になられる姿を目の当たりにし、若い人たちのパワーは本当に凄いなと思いました。もしここにいらっしゃる学生さんの中で、自分は何がしたらいいのか分からないという方がいらっしゃるなら、是非匹見町へ足を運んでいただきたいです。過疎という言葉が生まれた町という、そのフレーズだけでは分からない、その地域に行かないと分からない、お年寄りの方は確かに多いけど、すごく生き生きとしていらっしゃるお年寄りがたくさんおられて、その方々と触れることでいろんな気付きも多いと思います。人手も不足しているので、作業の手伝いをしていただく中で、過疎という言葉だけでは分からない、リアルな地域について肌で感じていただけると嬉しいなと思います。頭で考えるだけでは絶対に分からない、体験を通じて分かることというのがあります。何かのきっかけで匹見町に興味を持ってくださる方がいらっしゃるのであれば、是非声を掛けていただきたいと思います。

青木氏：ありがとうございます。井手さん、お願いします。

井手氏：私は東京や大阪の社会部で長く仕事をしたのですが、司法界っていうのは本当に頭のいい人たちが多くって、例えば出身大学でいうと、偏差値の高い人達がたくさんいます。法学部という並びでいうと、当然きれいに偏差値で並んじゃう訳です。ところが、そういうところ、そういう人たちのところに取材に行っても、私は総合科学部というまさに世界に 1 つの学部だったものですから、コンプレックスを感じたり、マウントを取られたりすることなく取材することができました。今同種の学部も増えているのかもしれませんけれども、みなさんは世界で初めて誕生したこの広島大学総合科学部に籍を置いたわけですから、これを誇りに思って、これからの人生を歩んでいただければと思います。今日の討論でもありましたように役に立ったことはたくさんありますけれども、私は何よりもここ、総合科学部で学んだ経験が一番の財産だったと思っております。頑張ってください。

青木氏：ありがとうございます。教員はこれからみなさん学生と付き合うことになるかと思いますけど、その中でも教員を代表して 1 番学生に近い片山さん、いかがですか？

片山氏：ありがとうございます。私はまだ学生の気持ちを半分持っているので、みなさんの凄い不安な気持ちとか分かるかなって思ってます。私もさっきスピーチでお話ししたんですけど、1 番は研究者になろうとか決めた時、あとは半年程共同研究のために海外に行ったのですが、その決断をする時凄く怖くて。私自身の本来の性格は凄く臆病で、挑戦するのが怖いって思うタイプなんです

けど、そういった時に自分の性格上、挑戦しないのは凄い悔しいなって思います。諦めが悪いので挑戦しようと思うんですけど、その時にも凄く悩んで、悩みに悩み抜いて決めることが多くて。でもそう悩んで決めたことは、自分で責任をもてるというか、誰かに言われたからやるんじゃなくて、自分が悩んで自分が出した答えだからこれは覚悟をもってやろう、という気持ちでいつも取り組んでいます。でもそう思ったとしても、例えば研究者になるって決めた時も、自分はこの先仕事があるのかな？研究うまくやっていけるかな？とかそう思ってた時もあったんですけど。覚悟して決めた後にそう思ったとしても、自分が選択したっていうことは過去なので決まってることなんですけど、これからの自分っていうのはどういうふうにも変えれると思っていて、自分が選択したことが良かったなって思えるような自分でいつもありたいなって思っています。

なので、みなさんもこれから就職とか進学とか色んな分野を決める時もそうだと思うんですけど、たくさん悩んで人生の大きな決断をする時が来ると思うんですけど、そういう時は悩み抜いた末に、これで良かったなって思える自分になれるように、いつも頑張っていってほしいなって思います。以上です。

青木氏：ありがとうございました。まだまだお話をお伺いしたいところではあるんですけど、予定の時間を過ぎておりますので、大変残念ではありますけれども、ここで第 2 部を終了とさせていただきます。この後懇親会が開催されますので、学生のみなさんは、せっかくの機会ですので先輩方に色々と話を積極的に聞きにいっていただければと思いますし、ここに登壇のみなさんは学生と積極的にコミュニケーションを図っていただければと思います。それではみなさん、今日は長時間に渡りましてありがとうございました。

河本氏：青木先生、皆様、ありがとうございました。それでは最後に、総合科学科長坂田桐子より閉会のご挨拶を申し上げます。坂田学科長、よろしくお願いいたします。

坂田氏：皆様、本日は大変蒸し暑い中、総合科学部 50 周年記念シンポジウムに多数御参加いただきまして、本当にありがとうございました。また、御登壇いただきましたスピーカーの皆様にも心より感謝申し上げます。

このシンポジウムでは、スピーカーの皆様から、総科で何を学び、その学びを社会でどのように活かすことができたのかということを共有していただきました。そのお話はいずれも、総合科学部が歩んできた道が間違ってはいなかった、と感じさせていただけるものだったと思っています。総合科学部が 1 つの狭い専門性に囚われず、自由に学びたいことを学べる環境をある程度作れていたこと、困難な問題に果敢にチャレンジし、失敗しても諦めずに解決の糸口を見つける力、自分を型にはめず越境する力、そして文化や価値観の異なる多様な人々とぶつかりながらも理解し合う力を習得できる場になり得ていたことを改めて実感いたしました。これも総合科学部のミッションを果たすために、時には大喧嘩しながらも尽力してこられた歴代の教職員の皆様、そして総科の理念を歓迎し、主体的、自立的に活動してこられたこれまでの学生、卒業生の皆様の努力の賜物と思います。問題はこれからの 50 年だと思っています。社会の問題が複雑化の一途をたどり、総合知の必要性が更に高まっている現在、総合科学部はそのミッションの実現に更に前進する必要があると思います。これまでは学際性・総合性を追求するというそのミッションそのものが総科のユニークさでした。しかし、近年では多くの大学で 学際融合を目指す学部や大学院が登場していることを考えますと、これからはそのミッションの達成の程度やその質が問われる時代になると思います。総合科学部の玄関には、「ひろだいそうかは世界にひとつ」、と刻まれた置石（次ページ）がありますが、これから先も唯一無二の学部であれるように、教職員も学生さんも共に試行錯誤をしながら、変化や葛藤を恐れずに進んでいきたいと考えます。同窓生の皆様、また、本日御参加いただきました他学部の皆様、そして地域の皆様には、今後とも総合科学部に温かいエールをお送りいただけますようお願いを申し上げまして、閉会の挨拶に代えさせていただきます。

本日はお集まりいただきまして、誠にありがとうございました。

河本氏：それではこれを持ちまして、総合科学部設立 50 周年記念シンポジウムを終えたいと思います。皆様、どうもありがとうございました。

せかいをひらく

ひろがれはるかな

2024年
祝
総合科学部創立50周年
総合科学部同窓会 寄贈
75&75
漕ぎ出せ 池池の海に
走れ 創造の彼方へ
150th ANNIVERSARY

2.2. 記念講演

堀川 恵子氏（ノンフィクション作家）
越境する力―ジャーナリズムの世界を駆けて―

8 月 10 日（土）、総合科学部創立 50 周年を祝して記念式典・記念講演・祝賀会（兼同窓会大会）が ANA クラウンプラザホテルで開催された。記念式典・記念講演には、学外者 153 名（来賓 11 名、名誉教授 14 名、企業関係者 5 名、同窓会員 123 名）、学内者 101 名（教職員 63 名、学生 38 名）で、合わせて 254 名が参加し、盛大に行われた。

記念講演はノンフィクション作家の堀川恵子氏（総科 15 期・1988 年入学、外国語コース）により「越境する力―ジャーナリズムの世界を駆けて―」と題して行われた。講演の中で堀川氏は、ご自身の経験をふまえながら、自分の現在の場所から飛び出して「越境」するには大変な勇気が必要であること、しかしその先には果てしない可能性が広がっていること、そして総合科学部の学生には「越境」できる大きな力が備わっていることを力強く伝えた。講演終了後には会場から大きな拍手が沸き起こった。続く祝賀会・同窓会大会にて、堀川氏には同窓会から今堀誠二特別賞が贈られた。

以下は堀川氏の略歴である。

1969 年広島県三原市生まれ。高校まで三原で過ごし、1988 年広島大学総合科学部入学、外国語コース（英語）履修。学生生活の 4 年間を千田キャンパスで過ごす。

1992 年、広島テレビ放送に女性初の報道記者として入社し、原爆・行政・経済問題など幅広く取材。2004 年に独立して東京へ。2012 年まで NHK を中心にテレビドキュメンタリー制作を手掛け、『ETV 特集 死刑囚永山則夫―獄中 28 年間の対話―』で第 47 回ギャラクシー賞大賞を受賞した。その他、放送ウーマン賞、放送人グランプリなどを受賞。

2013 年以降は執筆に専念。講談社ノンフィクション賞、新潮ドキュメント賞、司馬遼太郎賞などのほか、2016 年『原爆供養塔―忘れられた遺骨の 70 年―』（文藝春秋）で第 47 回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。

2021 年 7 月、新著『暁の宇品 陸軍船舶司令官たちのヒロシマ』（講談社）を上梓し、第 48 回大佛次郎賞を受賞。

2022 年から読売新聞社・読書委員。

2023 年から開高健ノンフィクション賞審査員。

2024 年、第 36 回アジア・太平洋賞選考委員。

次ページ以降は講演会全体の記録である。

（広島大学大学院人間社会科学研究科・総合科学部 教授　林 光緒）

坂田氏：広島大学総合科学部創立 50 周年記念講演を開催いたします。司会を務めさせていただきます、総合科学部副学部長の坂田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

早速ですが、この度ご講演いただく堀川恵子様のご紹介をさせていただきます。堀川様は、1969 年に広島県三原市でお生まれになりました。1988 年（昭和 63 年）に広島大学総合科学部に入学され、外国語コースを 1992 年にご卒業されました。ご卒業後は、広島テレビ放送に女性初の報道記者として入社された後、 2004 年からは独立して東京に拠点を移され、 2012 年までは NHK を中心にテレビドキュメンタリー番組を制作され、ギャラクシー賞大賞をはじめ、放送ウーマン賞、放送人グランプリなど多くの賞を受賞されました。2013 年以降はノンフィクション作家としての功績を数多く残されています。ご覧のように多くの受賞がありまして、全てご紹介すると時間が足りなくなるのですが、講談社ノンフィクション賞、新潮ドキュメント賞、大宅壮一ノンフィクション賞といったノンフィクションに贈られる大きな文学賞を多数受賞されているほか、2021 年には大佛次郎賞を受賞されています。また、2022 年からは読売新聞社の読書委員やノンフィクション賞の審査委員などもお務めになり、今年度は、アジア・太平洋の政治、経済、外交、社会、文化などについて優れた著書を発表した研究者や実践者に贈られるアジア・太平洋賞の選考委員に就任されるなど、ご活躍の場を広げておられます。

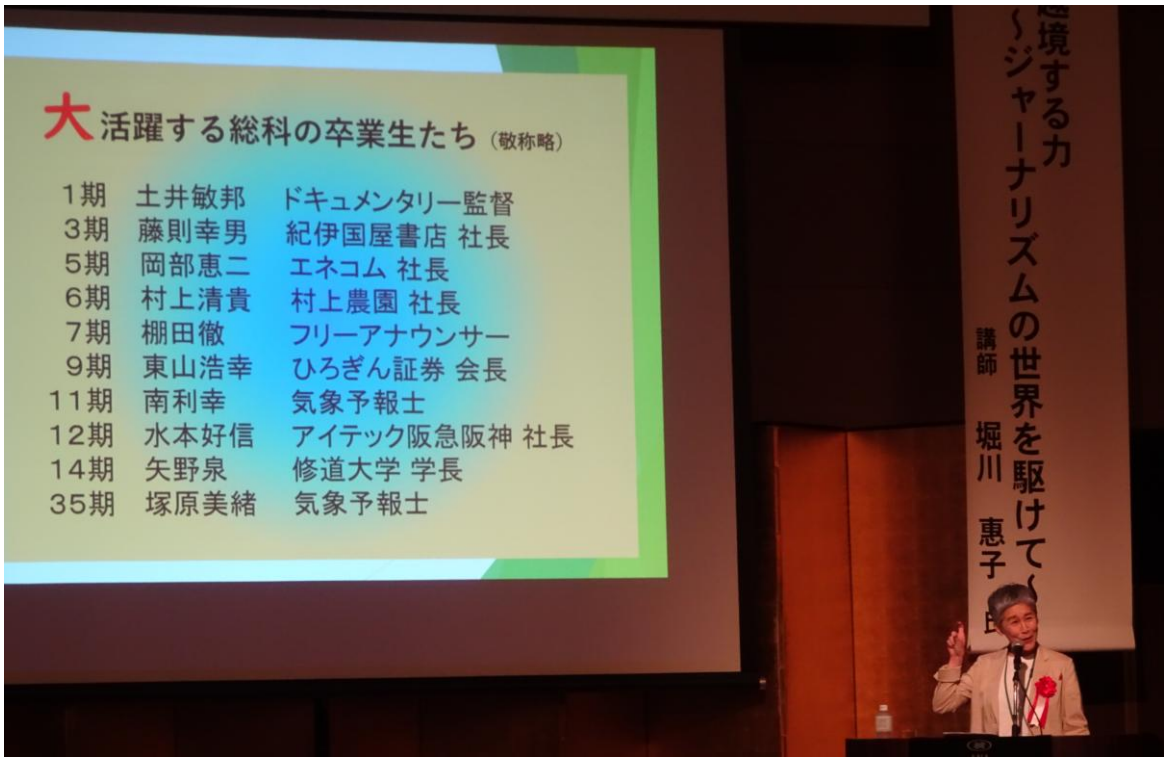
本日は「越境する力―ジャーナリズムの世界を駆けて―」というタイトルでご講演いただきます。それでは早速、堀川様にご登壇いただきます。皆様、盛大な拍手でお迎えください。

堀川氏：皆様、こんにちは。堀川恵子と申します。作家という肩書きで東京をベースに働いております。ちょうどこの秋に 3 年ぶりに新作を出版する予定で、昨日脱稿し、つい先ほど、這うようにして会場に辿り着きました。(拍手)、ありがとうございます。朦朧とした頭で広島駅の正面に着きましたら、見たことない赤い電車が来るんです。よく見ると車体に「75 プラス 75」って書いてありまして、広島大学のラッピング電車が出迎えてくれました。あのラッピング電車には学長のサインがどこかにあるそうですね。それに触るとご利益があるとかないとか都市伝説を聞いたことがあるんですが、どこにあるか分かりませんでした。そんなこんなでもう本当に役不足なんですが、本日の講演を務めさせていただきます。

私は 1992 年、総科 15 期の卒業生です。外国語コースでした。ちょうど私が卒業する年に、総科が全面的に千田を引き上げて西条キャンパスに移るというタイミングでした。本当に最後の 1 年ぐらいは、段々キャンパスから色んなものがなくなっていって、ものすごく寂しくて。みなさん覚えてますか？　半地下の教室。雨漏りすごかったですよね。あれも最後は放置状態で、窓際に座るとノートが濡れる、みたいなそんな状態で、凄惨な雰囲気を漂わせていました。ちょうど卒業式の 2 日前だったか、何かの用事で千田に行きましたら、森戸道路はトラックの往来で土煙がたっていて、引っ越しが行われてたんですね。自分の母校が、自分が過ごしたキャンパスが消えていくような切ない感情を抱いたことを覚えています。

きょうは私がこういう形で立たせていただいておりますけれども、総科の先輩方は本当にすごい先輩たちがいっぱいいます。スライドをご覧ください。「俺の名前がない」、とおっしゃる方がいらっしゃるかもしれませんが、一応事務局から候補を挙げていただいて、さらにこの行数に縮まる人数に絞らせていただきました。ということで、スライドの「大活躍」、の「大」に意味があります。1 期では土井敏邦さん、日本を代表するドキュメンタリー監督です。土井さんは、実は、私が 2009 年に NHK で作った番組が、テレビ業界のもっとも権威ある賞であるギャラクシー賞大賞を受賞したんですが、その記念講演だったかに会場に駆けつけてくださって、「君って広大らしいね」と。東京で「広大」っていう言葉を聞いたのは多分あの時が初めてで、「僕も総科だよ」、とそんなふうに励ましの声をかけてくださいました。ちょうど先月、日本記者クラブで土井さんの記者会見がありました。土井さんはパレスチナの取材に長く取り組んでおられて、パレスチナにおけるハマスの活動が実際は市民にどう受け止められているのかという現状について 2 時間ぐらい話をされて、私もオンラインで拝聴しました。まさに総合科学部は第 1 期生から、日本を代表する人材を送り出していることに驚かされます。

続いて、私自身も今回初めて知ったんですが、3 期生には紀伊国屋書店社長がいらっしゃるということで、藤則幸男先輩。本当に驚きました。これって新宿の、あの紀伊国屋書店で間違いないのかと、思わずネットの企業情報を確認してしまいました。藤則先輩にはぜひ、店頭に小さくていいから堀川恵子コーナーを作っていただきたい、本



当にご尊敬申し上げます。続いてエネコム社長、それから先程ご登壇いただいた、村上農園の村上社長、きょう懇親会で司会をされる、広島県民なら誰でも知っている棚田アナウンサー。ひろぎん証券会長の東山さん、気象予報士の南さんも総科です。私、南さんはいつもテレビで見ているのに、広大とは長く存じ上げませんでした。おそらく総科の卒業生で最も全国放送に出続けている方でしょう。南さんが先輩と分かってからは、南さんが画面に出てくるたび心配でたまらないんです。きょうのギャグ、どうかすべりませんように、って。さらに、私の1期前の矢野様、なんと修道大学学長でいらっしゃる。本当にすごい人材を総科は輩出をしてきているということを、このリストを見るだけでも実感いたします。

そういう中で、じゃあ私がきょうここで何を喋ればいいのかということを、新幹線の中で考えてこんでしまいました。私が1つだけ自信をもって言えることがあるとすれば、誰よりもたくさん失敗を重ねてきたことであろうと思います。そして誰よりも同じ場所に居続けなかった、越境を続けてきた、チャレンジをしてきた、ということかもしれません。高い場所で自分を語ると、どうしても自慢するような方向になってしまうので避けてきたのですが、今日も、裏には膨大な失敗の山があるということをご承知おきいただいて、拙い話ですが聞いていただければと思います。

それからもう1点、きょうは会場に随分若い方たちがいらっしゃる。大体こういう同窓会の方が集まる会場っていうのは平均年齢上がりますよね。だけど学生さんが 40 人ぐらい来てくださっていると聞いています。総科 30 周年のときからずっと在学生のみなさんもご一緒していただいてるそうですね。本当に素晴らしいことだと思います。だから今日は、若いみなさん、後輩たちに向けても少しでも参考になることを語れたらなと思っています。

私は 1992 年に広島テレビ放送に入社いたしました。実は最初はアナウンサー試験を受けたんです。そのアナウンサー試験の最終面接が行われた翌日だったか、報道局長から直電があって、「堀川君、アナウンサーもいいけど記者の試験も受けてくれない？」っていわれたんです。喜花報道局長も広大の卒業生でした。「人の原稿を読んでるよりも、書く方が面白いよ」、ってそそのかされて、突然一般入社試験の3次面接に呼ばれて行ったら、当時の社長が讀賣新聞社の元ワシントン支局長の山本和朗さん。いきなり英語で面接が始まって、20 分ぐらい色々とおしゃべりをしました。私はその時、実は NHK に行くつもりで、あとは健康診断を残すだけだったんですが、山本社長に「NHK なんかつまんないよ、行っても男社会だから女は何もやらせてもらえない、うちに来たらニューヨーク支局に行かせてあげる」って騙されて、というか、その言葉に乗せられて広島テレビに就職しました。ところが蓋を開けてみると、私は女性で

初めての新人記者。採用第1号だということが分かりまして、ここからは大学時代とは全く別世界になりました。

今、NHK の朝の連続ドラマが放送されていますが、主人公の虎ちゃんが、酷い男女差別や女性に対する理不尽な出来事にぶつかって「はて？」と発する、あの連続でした。最初に研修でいわれた言葉は、「堀川、髪を切ってこい」、「スカートを履くな」、「ヒールはここで脱げ」と、目の前でヒールを脱がされて裸足になるという、そんなスタートだったんです。今だったらハラスメントで1発でアウトだと思うんですけどね。ですから、私は広島テレビにいた 12 年間、ずっと腰まである長い髪で、スカートを履いて、ピンヒールで取材を続けました。まあ、無言の抗議のようなものです、外見なんて関係ないでしょ、という。

女性が報道の現場に入ってきて、会社もてんやわんや。まず問題になったのは泊まり勤務です。「女を会社になんか泊まらせるのか、何か間違いが起きたらどうする」という話です。え、間違いってなんだ？　っていうところから始まって、なかなか面白いものを見ました。取材先でも、「女は来るな」、とか「男の記者を寄越してくれ」っていわれたこともありましたし、警察で夜回り取材に行ったら警察官から、「若い女がなんでこんな遅くまで1人で歩いてるんだ！」って。取材なんですけどね。

ただ、仕事は抜群に面白かった。私に、取材という仕事を与えて下さった喜花報道局長には一生、感謝してもしきれません。辛くて大変なことが沢山あっても、取材が楽しいので、どんなことも我慢できる。スクープって男女差がないんですよね。頑張った人間だけが成果を得られる。もう1つ付け加えると、運がいい人間がスクープを手にしていく、形を残していける、それが私が見た報道の現場でした。そういう手応えを得て、まずは警察担当記者、司法担当記者として必死に走り続けました。

さて、私にとって最初の「越境」は 1997 年、入社して5年目です。それまではスクープを取るだけに明け暮れる記者生活を送っていたんですが、ある日、因島の住人から1通のタレコミがありまして、東京の経営者が因島にたった1つしかない老人ホームの施設費を私的に流用して乱脈経営をやっているらしいと。調べましたら東京の田園調布に暮らす経営者でした。クルーを連れて東京に赴き、テレビカメラを回しながら彼を追いかけまわして、乱脈経営の裏もとって、スクープとして報道いたしました。この報道によって広島県の監査が入り、最終的には老人ホームに業務改善命令が下され、閉鎖されて、と各社が総出で追いかけてくるような大きな流れになっていくんです。この取材をするうち、私はふと、「老人ホームが閉鎖されて、島のお年寄りは困ってないのかな？」と思って、取材の合間を縫って島を歩いたことがあったんです。そこで見た光景というのは今でも忘れられません。

生活保護のお年寄り、身寄りがない人、歩けない人、そういう方々に、今までは日中は老人ホームに通うデイサービス的なものがあって、なんとか福祉の目と手が届いていたんです。それが老人ホームが機能しなくなって、家で寝たきり、食べるものもないという状態に陥っていった。あるお宅では、身動きの取れないお年寄りの枕元に、近所の人が豆菓子を置いていく、それで命を繋いでいる。トイレにも歩いて行けないので垂れ流し状態。そういう現場に出くわして、今でも思い出すだけで胸が詰まりそうになるんですけど、自分が伝えたニュースってこういうことだったのかと。老人ホームの乱脈経営をスクープしたのはいいんですが、じゃあ実際に市民の目線から見た時にこのニュースがどういう意味を持つのかということにようやく思いが至って。

よくよく調べていくと、次から次へと島のあちこちで孤独死が起きていて、さらには認知症のお年寄りが餓死したケースもありました。餓死、今の時代に餓死ですよ。そういう現実を自分の足で歩いて 2 年ぐらい取材して、97 年に全国放送のドキュメンタリーを作りました。この時、私は記者一本の生活は卒業しようと思ったんです。スクープは、もういいって。私の記者人生にとってこれから大事なのは、情報の速さを競うスクープではない。何を、どう、どこまで伝えるか、いかに深く伝えるか、そういうところに自分が至らないと、報道の仕事で生きていく意味はないなって思いました。正直いうとスクープ合戦に疲れ果てていた時でもありましたし、その方向に舵を切りました。ですから、その後は原爆の問題であるとか、マツダのロータリーエンジンの復活秘話とか、長尺の1時間ぐらいのドキュメンタリーをディレクターとして次々に作っては全国放送に送っていった。もう、本当に仕事が楽しくて楽しくて仕方がない。最高のタイミングで、34 歳のとき、また「越境」がやってきたわけです。

なぜ広島テレビを辞めたか。理由は2つあります。1つは、山本社長が入社の時におっしゃって

くださったニューヨーク特派員に選ばれなかったことです。そろそろ私の番が来ると思って待ってたんですよ。1つ上の先輩が行った、次は自分だと。ところが、私を飛び越して1つ下の後輩に行っちゃったんです。それも記者でなくてカメラマンの後輩に。私はデスクに、なんで私じゃないんですか？　と詰め寄ったら、実はニューヨーク特派員は2人体制で、今回日本テレビが出す記者がたまたま女性なので、女2人は置いとけない、女2人は危ないから男で、ということでした。「その代わり、お前をデスクにしてやる」、ということになりました。

記者、ディレクターというのは現場に出られるんですけど、記者の司令塔たるデスクはずっと会社にいなくてはならない。上司としては昇進させる意味合いでデスクにしてくれたんですけど、私にしてみたら海外特派員の夢も破れたうえに、手足をもがれてしまった感じでした。そこで、このまま広島テレビにいていいかと、すごく迷いました。テレビ局っていうのは収入もいいですし、地元の中では一目置かれます。敬意を持って接してもらえるし、名刺があればどんな偉い人にでも会える。これを全部捨てて東京に行くという選択は、そう簡単ではありませんでした。ただ、現場でディレクターとして制作を続けるためには、広島では選択肢がなかった。そこですべてを捨てて、東京に出ていくことを決めました。

先程、越智学長が松下幸之助のお話をされて、「羅針盤を持つこと、そして操縦桿を自分の手で握り続けること」とおっしゃいましたが、あの時の私はまさにそうでした。私が進みたい道、羅針盤に、会社でデスクの仕事をして、そして組織の中で偉くなっていくという、その道は残念ながら含まれていなかった。現場で働き続けるために、自分で操縦桿を握り続けて生きるためには、広島を離れるしかありませんでした。

奇遇にも松下幸之助さんは、私と同じ誕生日なんですけど、辞めるかどうしようか迷っていった時に、松下幸之助の『道を開く』という大ベストセラーを手に取ったんです。ある一節が目に飛び込んできました。「迷うということは、決断を先延ばしにすることである」、という、この一言に触れて、もう迷うのをやめました。もし東京に行ってモノにならなくて、最後はどこかでアルバイトをして食いつないでいくしかなくなったとしても、そこにチャレンジしなかった後悔を一生、持ち続けるよりかは、チャレンジして失敗するほうが遥かにいいだろう、そう思って 34 歳の時、誰も知る人もいない東京に飛び出しました。

東京に行って、文字通り、死に物狂いで仕事をしました。東京という町は、頑張ろうと必死に進む人にとってはチャンスがいっぱいある街でして、上京して1年後には NHK はじめ、ほぼ全ての民放で番組を手がけました。自分が出した企画がなぜか全部、通っていく、だから同時並行で 3 本も4本も番組制作を手がける生活になりました。きょうも、会場には朝日新聞で活躍されて、今はテレビ朝日系の広島ホームテレビにお勤めの井手先輩がおられますけど、そのテレビ朝日とも長編のドキュメンタリーを作りました。「田原総一朗スペシャル」という特別枠で、私が企画した、第二次世界大戦後、シンガポールで行われた BC 級戦犯裁判がテーマでした。もう色んな番組取材が進行していて、シンガポールに田原総一朗さんを連れて行って現地ロケをして、そして田原さんには日本に戻っていただいて、私は単身イギリスに飛んで、ヒースロー空港で次のクルーを拾って英国戦争博物館の取材に行ってと、国内外を走り回る生活が数年続きました。

ただ、私は満たされてくると、ここで満足して、ここにい続けていいんだろうか？　という自問自答が湧いてきてしまうんですね。2008 年ころだったと思うんですけれども、確かに今、自分は売れっ子のディレクターとして色んな番組を作り、自分の企画で大勢の人を動かして、番組を放送することができている。想定以上の成果には違いない。私の唯一の自慢は、人から振られた企画を担当した経験がないことで、常に自分の中にあるテーマを実現してきました。自分の中にある「なぜ」を大事にする。なぜこうなってるの？　なぜこんなことが起きるの？　というなぜを1つ1つ番組にしてきた。

だけれども、これは本当に自分がやりたかったことなんだろうか？　と思うようになってくるわけです。つまり、80 点の番組を年間 3 本、4 本、5 本と出し続けて、確かにお金も儲かるし、テレビ局からは大事に扱ってもらえるし、東京に居場所はできた。でもある時、「人々の記憶や心に残るものは 80 点の番組じゃないよ」、と、あるプロデューサーからいわれたんです。「君はどんな番組も 80 点に仕上げる力がある、だけどそんなものは来年にはみんな忘れてる、本気で作ってみな、100 点の番組を」と。その言葉に奮起して、粗製乱造とはいいませんけど、たくさん作れるディレクターは、もう卒業しようと思いました。現実的にはそれだけの蓄えもできたということであり

ますけど。2009 年から NHK に絞って、どんなに作りたくても 1 年に 1 本、と自分に課して番組の制作を始めていくわけであります。それで、さっき申し上げたようなギャラクシー賞の大賞をいただくことができました。

ところがまた 3 年ほど経った 2012 年ころ、さらに「越境」をすることになるわけです。確かに番組制作は面白い。テレビって集団作業なので、自分が最初にやろうと思っていたこと以上のものが大勢のスタッフによって実現する、想像しなかった作品に仕上がっていくという醍醐味を味わうことができるんです。どんなカメラマンとどんなロケをするか。どんな AD（アシスタントディレクター：助手）とどんな準備をするか。どんな編集マンとどんなカットを繋いでいくか、どんなプロデューサーと出会えるか。この出会いによって、自分 1 人だったら 50 点しかできなかったものが、500 点、5000 点になっていくっていう、そういう醍醐味です。まさに自分が一生の仕事に定めてよかったと思える仕事ではあったんですが、やってるうちに 1 つ大きな疑問が湧いてきました。

今度の疑問は、「こんなに捨てていいのか？」という疑問です。どういう意味かと申しますと、テレビ番組の放送時間って、長くても 90 分です。60 分から 90 分。自分が一生懸命歩いて取材した要素の中で、番組の中に残せるのは 1 割もないんです。テレビっていう媒体は、たくさんのことを理論立てて伝えるというよりも、メッセージを 1 つにギリギリと絞って、視聴者の心をわしづかみしに行くという特性がある。ですからたくさんの取材から削いで削いで、本当に魂といえる 1 点だけを残す仕事、これはこれで楽しい。しかし、9 割のものを捨てなきゃいけない。私のように、戦争とかそういうことに興味があって取材していますと、ここで私が捨てちゃったら、これ一生、誰の目にも触れないよね、っていう話がいっぱいあるんです。

それで 2012 年の NHK の番組制作を最後に、書くという仕事へと踏み出すことになりました。ここからはパワーポイントを使って、私の仕事は作家なので、どんな仕事をしているかということを見ていただくのが 1 番だろうと思いますので、ざざっとご紹介していこうと思います。

私が最初に上梓した本は、この「チンチン電車と女学生」です。広島テレビで作った番組を、私が上京した翌年の 2005 年に、小笠原信之さんというジャーナリストの方と一緒に本にしたもの

です。広島テレビが、いわば餞別で、「会社は著作権は主張しないから、お前が好きに書いていいよ」、と、著作権担当の大先輩が送り出してくれたおかげで本にすることができました。この本は、私が後に執筆という仕事を選ぶ大きな動機になりました。さっき申し上げたように、テレビの番組では全く取り上げられなかった、捨ててしまった多くの証言をこの本の中に盛り込むことができたんです。テレビはなかなか再放送がないんですよね。どんなに良い番組作っても、アーカイブスにリーチすることも難しい。これはテレビが抱える大きな問題です。ただ、こうやって本にしちゃえば、興味のある人が好きな時に手に取ってくれる。今でも反響が来るんですよ。もう 20 年も前の本なんですけどね。本を読んだ感想が届くし、本を原作にしてミュージカルにしたい、舞台にしたいと、色んな展開がされています。

この写真は、広電の 651 型、被爆電車です。この番組を作った、本を書いた 1 番のきっかけは、広島電鉄に取材に行った時に、会社の敷地の隅にこの電車が停まっていまして、被爆電車だと初めて教えてもらって。その時の役員さんが「この型の被爆電車が 4 台あるんだけど、全部潰そうと思っている、足が遅いから、朝晩のラッシュに走らせちゃうと後ろに行列ができてしまう。ついたあだ名が部隊長。みんなをぞろぞろ引き連れて歩く部隊長。だけど被爆電車を潰すとなったらメディアが反対するでしょうし」っていわれましてね。私はその瞬間に、これは番組にせねばと、と思いましたね。なんとかこの電車を守らねば、と思って。さらにこの電車を運転していたのは、実は 10 代の女学生たちだったということが分かってき

て、もちろん戦争末期の特殊な話です。最近では誰でも知ってる話になりましたが、戦争末期に男手が戦場へ取られていって、16 歳、17 歳の女の子たちがチンチン電車を運転して、さらには少女運転手を養成する学校まで広電が作っていて、そして長く沈黙を守っていた女学生さんたちを探し出して語っていただくという流れになっていきます。先ほども言いましたが、本を原作としたミュージカルや演劇が今も続いています。そういう成功体験を、この本で得ました。

次の本になりますけど、2009 年。これも NHK の番組と同時並行で作ったものです。私が、いつか死ぬまでにやらなきゃ、と思っていたテーマが「死刑」です。広テレ時代のことですが、広島拘置所で死刑執行があったときに取材しようと思ってデスクに提案したら、「お前、勘弁してくれよ、死刑みたいなややこしい問題をやられたら、視聴者から抗議がいっぱい来るから触っちゃ駄目だ、死刑はタブーだ」、っていわれましてね。テレビと本の内容は全く違うんですが、この本は、私の初めての単著です。内容を非常に大雑把にいいますと、死刑と無期の間を定めている境界線を探った取材です。法学部の方であればお分かりかと思うんですけれども、「永山基準」という死刑の基準とされてきたものがある。この永山基準は一体どのように作られて、実際にどう運用されてきたのかということを、これまで誰もやってないんです。そこで色々調べましたら、当時この基準を作った最高裁第 2 小法廷で、裁判官は全員亡くなっていましたけれども、判決の下書きを作る調査官が 1 人だけ存命だと分かって、その方に取材をすることができました。実は永山基準というのは基準ではなかった、という非常に乱暴な説明になりますけど、そういうところに行き当たって本にいたしました。出版当初は、無名のディレクターが書いた本なので、全然書店に並ばないんですよ。恥ずかしながら、わざわざ自分の書いた本を探しに行くと、法学の専門書の中にポンと置いてあるだけで誰も見てくれない。私としてはこれすごいスクープを書いたんだけど誰も評価してくれないな、とガッカリしていたら、翌年、講談社ノンフィクション賞という、ノンフィクション作家にとっては業界で最も大きな賞のひとつをいただきました。

1 つ付け加えますと、この講談社ノンフィクション賞を受賞した時、広島大学がすぐに声をかけて下さって、浅原学長時代ですが、広島大学学長賞を授けて下さいました。長く無沙汰が続いていた母校との縁が繋がったのは、この時の受賞がきっかけでした。

その次、2 年後に書いた本が『裁かれた命』。これは、別のテーマで死刑に向き合った本です。主人公は、最高検察庁の元検事でいらっしゃる土本武司さん。彼が一生に 1 度だけ求刑をした死刑事件を取りあげました。なぜならば、死刑を求刑した検事の元に、死刑執行直前までずっと死刑囚から手紙が送られていた、検事と死刑囚が文通をしていた、ということが分かりまして、1 人の人間を裁くということはどういうことか、1 人の人間に死刑を突きつけ、そして刑を執行させるという重みがいかなるものか、という問題に向き合いました。

そしてこの『永山則夫　封印された鑑定記録』も、先程の永山基準の取材から派生した本です。1968 年に起きた永山事件、若いみなさんはご存じないかもしれないんだけど、青森から集団就職で上京してきた 19 歳の、君らとまだ年近いよね。19 歳の少年が東京に出てきて、全国で 4 人の人をピストルで射殺して回るという事件が起きたんです。この事件の裁判が後に死刑の基準といわれる「永山基準」に繋がっていくんだけれども、実は先の『死刑の基準』を書いた時、すごく大きな疑問が残っていたんです。

彼の遺品は段ボール箱で 150 箱近くあって、膨大な裁判資料を全部読んだんですけど、その中にあった捜査段階の供述調書で、現場に被害者の財布が残されていた、その中に 20 万円が入っていた、っていう供述を見つけたんです。それまで永山事件というのは、青森から集団就職で上京した少年が、金欲しさで強盗を犯したといわれていたんです。だから、おかしいよな、って思ったんです。お金が欲しい彼が、なぜ現場に 20 万円も入ったお財布を残して行ったのか。供述調書には、被害者は人前で札束を数える癖があって、首からいつも分厚い財布をぶら下げていたとある。財布は目立つ場所にあった。なぜ、永山少年はそれを盗らなかったのか、ずっと気になっていました。最初は本にするつもりは全くなかったんですが、調べるうちに、なんと永山則夫さんが、死刑囚ですけれども刑が執行されているので永山さんと言いますが、彼が語った 100 数時間の生のテープを発見しまして、これは当時彼の精神鑑定にあたったお医者さんが録っていたものです。

それを聴きましたらば、彼がなぜ犯行を犯したのかという真の動機が語られていた。非常に乱暴に結論だけ申し上げますと、お金欲しさの犯行で

はなくて、自分を虐待してきた家族に復讐するための犯行であった、いってみれば愛情の貧困から起きた悲劇であるということが、彼が死刑執行されて四半世紀が経ってようやく分かるという、これはそういうような本です。

さらに続いて、本当に私はしつこいですね、いきなり死刑で4冊も書いちゃって、4冊目が『教誨師』というこの本です。先程の『裁かれた命』中に匿名で登場してくださった教誨師さんがいまして、教誨師というのは、死刑執行の時に死刑囚に最後まで寄り添う宗教者のことです。『裁かれた命』の時は、匿名でお出になっています。彼は広島の被爆者でもあったんです。8月6日に、ご自身が多くの仲間を見捨てて逃げた、その後悔を胸に東京に上京して、そして僧侶になられて、その時の後悔をご自分の中で少しでも償いたいという気持ちで、誰も振り返る人のいない死刑囚の最後に寄り添うという仕事を選ばれた。

教誨師には守秘義務が課されていますから、取材の最初に約束がありまして、「これまで50年間、東京拘置所の教誨師として死刑執行の場で見たことを全部語ろう、だけど、本を出すのはわしが死んでからにしてくれ、死後なら実名でいい」という約束でした。ですから取材をしている時は、出版まで十数年はかかるだろうと悠長に構えていたんです。でも実際には、お坊さんは病を患っておられて、医師から「5年後の生存率は0％」という宣告を受けていて、いってみれば命をかけて私に記憶を伝えてくれた、それを描いた本であります。 みなさん、死刑っていうと、なんとなく悪い人が殺される、そういえばああいう事件があったね、とうとう死刑執行されたね、と思うぐらいのことかもしれないんですけど。この本は実際に死刑囚というのはどういう人たちか、執行の現場で何が起きてるのかという内実を詳細に明らかにした本です。

お坊さんが亡くなられて、原稿を仕上げて、いざ出版するとなった時は、私の作家人生の中でも1番苦しい状況に置かれました。なぜならば、教誨師は、法務省から厳しい守秘義務を課されているからです。その守秘義務を破って全てを明らかにするということは、教誨100年の歴史の中で一度もなされていない。出版前には、法務省の代理人的な立場の方たちから、万が一これが出版されたら訴えるぞと、すぐに仮処分の申請をして本を差し止めるぞ、という脅しに近い配達証明が連日、自宅に届きました。その攻勢に出版元の講談社もだんだんひるんできて、「堀川さん、これちょっとヤバいから、お坊さんの名前を仮名にしましょうよ」っていう流れになってきましてね。そこで今度は講談社と大バトルを繰り広げて、じゃあ、原稿は引き上げさせてもらうとか、あちこちで大立ち回りを続けて、ヘトヘトになって出版にこぎつけた本です。

だけど、出版の翌年には法務省の書店の中にもこの本が平積みで売られているというような状況になりました。私の本の中では一番のロングセラーとなり、今でも毎年、版を重ねています。この5月には、全国教誨師連盟の大会に呼ばれて、この本の中身について講演を行わせていただき、死刑というものについてどう我々は向き合っていくべきか、という議論を堂々とさせて頂きました。これまでは守秘義務で誰も喋れなかったことが、500人もの会合で、法務省の方々もおられる前で語り合えるというような場面が今、現実のものとなっています。

先の教誨師の方は、取材の最後、こんなふうにおっしゃってました。「死刑が執行されても幸せになった人間は誰1人いません。だから本当は犯罪を防ぐ、減らす運動を考えなくてはならない」。このことを実現するために、私も作家として、今後もこの問題に取り組み続けていかねばいけないと思っています。

2014年ころから死刑問題も一息ついて、広島に置いてきた宿題をやらなきゃな、という気持ちになって、ここから広島関連の著作が続くことになります。まず『原爆供養塔』です。みなさんスライドの左側上、平和公園の原爆慰霊碑はよくご存じかと思いますけれども、右側の原爆供養塔は知らない人が多いですね。原爆慰霊碑の北側に150メートルほどにある緑のお椀を伏せたような塚です。ここに7万柱の遺骨が眠っています。その中の800数十柱については、住所もお名前も分かっている、それなのに引き取り手がないまま戦後が過ぎてきました。私はこれについてはずっと広島時代から不思議だったんです。

なぜ名前も住所も分かっているのに誰も引き取らないのか、ということで取材を始めました。私と同じ疑問を抱いて、戦後ずっと遺骨をご遺族の元に返す活動をされてきた佐伯敏子さんという人が、この本の主人公です。取材当時97歳でしたが、彼女の半生を描きながら、私自身も遺骨を訪ね歩く旅をしまして、1冊の本に仕上げました。この本は大宅壮一ノンフィクション賞を頂いたわけなんですけれども、きょうは仲間ばかりの会合なので、ちょっと表では話にくいことですが、

この本をどこから出版するかという話になったとき、私はあえて文藝春秋社を選びました。理由をご説明します。

私はそれまでに講談社ノンフィクション賞と新潮ドキュメント賞という、3 大ノンフィクション賞のうちの 2 つを取っていたんですが、あと 1 つ大宅賞が残っていますね、ということを新聞記者たちからさんざん言われるわけです。そこで大宅賞って過去にどんな作品が選ばれているのかと思って一覧を見た時に、原爆関連の著作が 1 冊もなかったことに驚きました。原爆投下は 20 世紀最大の出来事であることは間違いない事実で、それなのに戦後の保守論壇のど真ん中に君臨した文藝春秋社で、しかも事実上、その会社が主催する大宅賞という権威ある賞で原爆作品が 1 度も選ばれてない、これはおかしいじゃないか、と思ったんです。これまでも原爆投下をテーマにした立派な作品は沢山ありましたから。だから、自分の心の中では、半ば喧嘩を売るつもりで文藝春秋社から出してやろうと。まさか大宅賞まで取れるとは思ってませんでしたが、とにかくこれは文藝春秋から出さなきゃいけないと 1 人で覚悟を決めてやったということでありました。

次お願いします。それで 2 年後に、今度はこれも広島関連です。『戦禍に生きた演劇人たち』という本を出しております。みなさん、スライドのこの右側のさくら隊原爆殉難碑、ご存知でしょうか？　昔の広島テレビがあった近くの並木通りのそばにある碑ですが、同じさくら隊の慰霊碑が、スライドの左側です、東京のお寺にもあるんです。

さくら隊、つまり移動演劇隊は、戦時下、全国の地方都市をぐるぐる回って、そして殖産興業に励む国民を励まし、勇気を与えるため、ということで、政府の命令で活動をさせられていた演劇人たちの集団です。なぜ彼らが 1945 年 8 月 6 日、広島にいなきゃいけなかったのか。そこからリサーチを始めました。

リサーチを進める中で、スライドの写真の左側、さくら隊の 1 人の森下彰子さんという女性が、右側の夫、彼は当時朝鮮の京城と呼ばれたソウルに出征していて、戦後、ひとり生き残るんですが、森下彰子さんが広島の原爆で亡くなる直前まで、この夫に向けて書いていた手紙を見つけたんです。実は、この手紙は映画監督の大島渚さんも所在をご存じで、いつか映画にされるご予定だったそうですが、体調が悪化されてお亡くなりになって実現しなかったということも知りました。だから、これはどうしても私が残さねばと思いました。

実はさくら隊の中で、たった 1 人だけ、生き残った人がいるんです。演出家の八田元夫さん。原爆投下直前に主演の団員が倒れて、名前は丸山定夫といいますが、丸山さんの代わりを探すために、八田さんは東京に帰ってるんです。その間に原爆が落とされた。彼は、8 月 10 日だったかな、必死の思いで広島入りをして劇団員全員の骨を拾って歩いた。その彼が、記録を残していないはずがないと思ったんです。彼は短い本は書いてるんですけど、その短い本の元になったデータがあるはずだと思って、これを見つけるまでに 10 年以上かかりました。

関係者によると、八田さんの遺品はすべて早稲田大学の演劇博物館に納められたはずだという。ところが早稲田の演博に聞いても、そんな資料はないと言い張る。何年もやり取りを続けて、最終的には演博の倉庫に保管されていたのです。ただ演博の検索データベースに載ってなかったので、ないということにされていただけなんです。検索をかけたら出てこない、イコール、存在しないということになる、今の時代は。特に在校生のみなさんに伝えたいんだけれども、インターネットに出てないことは、世の中にない、ということじゃないんです。インターネットに誰も載せていない、というだけのこと。これは注意が必要ですね。

演博でようやく八田さんの史料が、数万点、ざくざく出てまいりまして、これを分析して『戦禍に生きた演劇人たち』という本を書くことができました。この写真、右側が丸山定夫さんです。8 月 6 日直前に倒れたという主演の男優さん。戦前は沢山の映画に出られています。それから左が元宝塚の女優で、「無法松の一生」という、戦時中の大ヒット作、有名な映画にもお出になった園井恵子さん。そんな彼らが、こういう簡単な座組で、一幕物の芝居を持って全国を回らされていたわけです。

この本も実は今、演劇になっていまして、全国を巡演中です、もう 3 年目ぐらいになるのかな。今年は広島でも上演されると聞いておりますけれども、正直いうと私が書いた本より、舞台のほうがはるかに面白いんです。だから本ってすごいなと思う。種さえ蒔いておけば、こうやって誰かが違う形にしてくれる、もっと魅力的な形でより多くの人たちに伝えてくれる。劇団の話なので、演劇にしたら面白いに決まってますよね。脚本はシライケイタさん、演出、松本祐子さん。現在の日本の演劇界を代表するお 2 人が、立派な演劇にしてくださって、大勢の観客を動員しています。

それからこの『狼の義　新犬養木堂伝』という本は、少し個人的な話になりますけれども、私の夫との共著です。夫は 2017 年に亡くなっているんですが、彼が亡くなるまでに半分書いて残していった宿題を私が仕上げたものです。犬養毅、よくご存知の 5.15 事件でテロに倒れた悲劇の宰相。その晩年、犬養毅は立憲政友会の総裁として非常に軍部に近かった、軍部と結託していたというようなことがいわれていましたが、夫が集めた資料を、彼の死後に色々見直していくと、暗殺直前に、ここの白地の部分です、こんな演説をしています。

「侵略主義というようなことはよほど今でも遅ればせのことである。どこまでも私は平和ということでもって進んでいきたい。立憲政友会が政権を持っている限り、戦争は絶対に起こさせない」

これはラジオで全国に向けて行ったものです。犬養毅とその周辺の人物たちには、通説とは異なる、もっと別の測面があるのではないか、ということで私なりに取材を重ね、夫が残した作品を仕上げまして、これは第 23 回司馬遼太郎賞を受賞しました。人生で 1 番嬉しい賞となりました。

最近の本は、『暁の宇品』です。最初に申し上げた、「なぜ」。私の中にずっとあった大きな「なぜ」の 1 つは、なぜ広島が最初に原爆を落とされる都市にならねばならなかったのかということでした。

実は昭和 20 年 4 月から、アメリカでは原爆をどこに投下するのか、候補地を定めるための目標検討委員会というのが開かれていまして、広島は第 1 回から最後までずっと候補地の筆頭にあがっているんです。その理由に挙げられていたのが、「重要な軍隊の乗船基地がある」という事実。それは海軍の呉ではなくて、陸軍の宇品のことです。

戦前、宇品には旧陸軍最大の輸送基地がありました。その宇品をターゲットとして広島が原爆投下候補地に選ばれたという事実にたどり着いたのは、2010 年ぐらいのことなんです。そこから、この話をなんとか世に出したい、原爆は落ちたんじゃなくて、落とされたんです、なぜ落とされたか、これをちゃんと探りたいと思うものの、なかなか話が展開していかない。

取材を進めていくうちに、2 人の高潔な軍人が残した未公開資料に出会うことができて、私の頭の中に、軍港宇品の光景と登場人物たちの物語の筋が立ち上がってきました。軍人の 1 人は、昭和 14 年 7 月の日中戦争の最中に、宇品のトップである船舶司令官を務めていた田尻昌次中将。実は、日中戦争の最中から日本はすでに輸送船が足りなくて、とてもじゃないけど戦争のできる状態ではなかった。田尻中将は、参謀本部と陸軍省に対して、このままじゃ戦争継続できない、いってみれば軍部にたてつく建白書を提出して首を切られた、軍を罷免されています。輸送は、日本と海外の戦場をつなぐ血管のようなものなので、戦争の全体像が見えるんですね。「兵站」とも言われますが、日本は、そこが決定的に足りなかった。

それから最後の宇品の船舶司令官となった佐伯文郎中将。この人は、戦争末期の非常に苦しい輸送のやり繰りをしながら、1945 年 8 月 6 日を広島で迎えます。陸軍船舶司令部の仕事は海上輸送で、輸送船で戦地に物資を届ける仕事です。戦地に兵隊を送り、軍需品を届け、糧秣を送る。だけれども 8 月 6 日、船舶司令部は佐伯司令官の命によって、海ではなくて自分たちの担任地域ではない陸側に全軍を投入させて市民の救援救護にあたった。その背景には、思わぬ事実がありました。これが分かった時点で私は、本にできると確信したんですけど、実は佐伯中将は陸軍大学校を卒業して参謀本部に初めて配属された時、関東大震災の戒厳司令部で交通参謀を務めていたんです。彼は関東大震災で自分が見たこと、聞いたこと、それから行ったことを参考に、広島の被爆地に入って全く同じ対応をして市民の救援に当たっていて、多くの命を救いました。

詳しいことは読んでいただければと思うんですけれど、いまだ南太平洋の海底には約 30 万人以上の船員さん、軍人たちが眠っています。この本を書いて、改めて思いました。日本は地政学的に「四面環海」、海に囲まれた島国ですので、何か有事が起きた時に他の国とは全然、環境が違う。ミサイルを打ち込まれなくても、海上封鎖されただけで、とてもじゃないけど国民は生きていけなくなる。食料の自給率は 30 数パーセントっていいますが、実質もっと低いでしょう。周辺の 3 つの海峡を塞がれたら、物資も燃料も何も入ってこなくなります。今、日本の石油備蓄は 200 数十日。日本軍が開戦を決意した時が 1 年半の石油備蓄しかなかった、だから開戦に踏み切った、といわれますが、今はそれ以下、その半分の石油すら備蓄できていない。そんな状態で隣国との戦争などは起こせるはずがない、いえ、起こしてはならないんですよね。どの国よりも周りの国と協力しながら平和を求めていかなくてはいけない国であるということを、私はこの『暁の宇品』という本を通して学んだところであります。

さて、私が作家になってからの仕事を見て頂き

ましたが、テレビ局の記者を皮切りに「越境」を繰り返してきました。越境する度にポジションは常に新入りです。だから、どこでも堂々と 0 からスタートを切ることができました。これは制作者にとってはすごく良い環境で、プライドも奢りも何ひとつなく、1 から新入りの気概をもってチャレンジしていける、そういう環境に常に自分を置いてきました。

先程広島テレビに入って大変だった経験を話しましたけれども、今こうして振り返ってみますと、10 人の敵がいたとしても、それを超える 100 人、200 人の味方がいたからこそ、私は越境してくることができたと思います。私のみならず、おそらくどんな仕事、どんな人生であっても、どれだけ多くの味方を得ることができるか、どれだけ多くの出会いを重ねていくことができるか、それによって進むべき道は開けていくんだろうなと実感しています。

きょうは学生さんたちが多くいらっしゃるので、最後に、テイラー・スイフトさんの言葉をお伝えしたいと思います。2022 年のアレ、聞いた人います？　うんうん、って頷いてる人が結構いますね、さすがです。彼女がニューヨーク大学の名誉博士号をもらった時、とても感動的な講演をしています。非常に乱暴に短くまとめますと、

「努力することを決して恥じないでほしい、努力をしないでもいいなんていうのは、もはや神話、昔話です。今、私の周りにいる人たちは、全員、努力をしてきた人たちです。人生には自分のために立ち上がらなければならない時がある。全力でしがみつく時もあれば、手放さなきゃいけない時もある。人生は重い。1 度に全てを背負おうとすると、重くなりすぎる時もある。成長して人生の新しい章に進むことというのはキャッチアンドリリース。つまり、残すべきものと捨てるべきものを選択していく、それが人生です」

私も自分の拙い半生を振り返った時に深く共感するところがありました。彼女はやっぱりすごいな、と、ちょっと感動しました。動画でたくさん出てますから、ぜひこの後、味わってもらえたらなと思います。

そういうことで時間が参りました。今まで色んな取材をしてきました。取材のジャンルも、それこそさっき申し上げたような死刑から、原爆から、軍事から、そして次の作品は医療です。日本の医療の重い課題を取り上げます。本当に、それぞれ専門家が大勢いる色んな分野に、抵抗なく飛び込んでいく、そして常にポジションは新入り。こういうことに躊躇なく踏み出せてきたのは、総科の 4 年間、自由な環境で過ごせたからなんだろうなって思います。

私が、文献からの引用を一切行わない卒論を提出した時、ある教授は、これは論文ではないと批判したそうです。しかし、私の担当教官のピーター・アンソニー・ゴールズベリ先生だけは、 引用がなくても、この子はこんなに走り回って調べている、この論文も読み方によっては取材を重ねた立派なものだと仰って下さって、なんとか卒業をさせていただきました。おかげで今があります。

きょう出席してくださった在校生のみなさんの前には、無限の可能性があります。もう、可能性しかないです。たまにはスマホを手から離して、色んな人と出会って、味方を増やして、もちろん喧嘩もしながらですけれども、生の人間関係を築いていって、そして人生を切り開いていってほしいなと心から思います。

講演を企画してくださいました関係者の皆様、そして私の拙い話を聞いてくださった同窓生の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

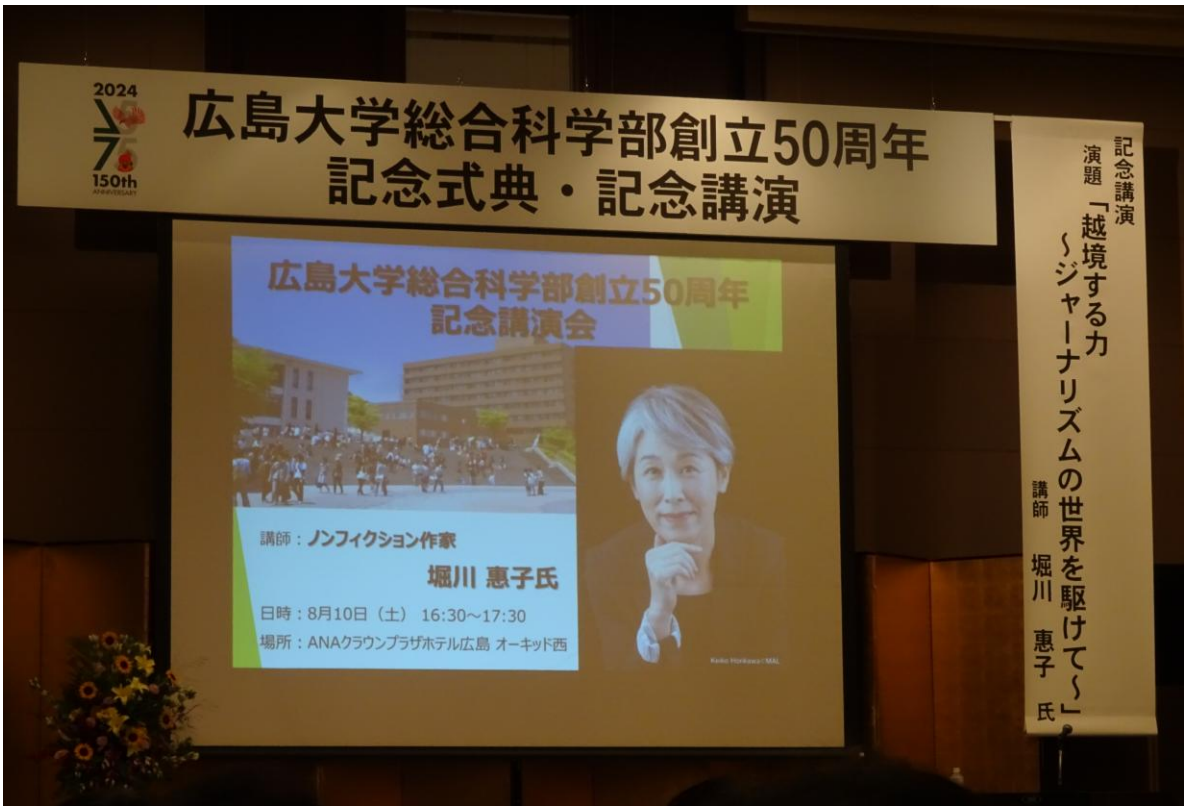
坂田氏：堀川様、素晴らしいご講演をどうもありがとうございました。続きまして、山田俊弘総合科学部長がお礼の言葉を申し上げます。

山田氏：堀川恵子さん、本日は、メッセージのたくさん詰まった、圧倒的なご講演、どうもありがとうございました。総合科学部では今年、創立 50 周年を記念する様々なイベントを開催しております。例えば、7 月 20 日には、サタケメモリアルホールで、『世界で活躍するひろだいそうか』と銘打ったシンポジウムを開催しました。シンポジウムでは、世界で活躍中の 8 人の総科卒業生にご登壇いただき、「活躍するためにはこんな力が必要だ」、というお話を聞かせていただきました。その中で、8 人が 8 人とも口を揃えて仰っていたことが、「越境する力、1 歩踏み出す力、挑戦する力」、だったのです。そしてこれは、本日、堀川さんが仰っていたことと完全に一致しています。本日の堀川さんのお話をお伺いして、私ははっきりと総科の強みがなんであるか認識することができました。本日、学長は、 航海で 1 番重要なのは羅針盤だと仰いました。総科の強み、つまり越境する力、一歩踏み出す力、挑戦する力がはっきりしたところです。羅針盤の方向は定まったというところでしょう。順風な航海になるかは分かりません

が、皆様方と一緒に、次の 50 年目に向けて、この航海を実り豊かな、意義深いものにしようではありませんか！

堀川さん、本日は大変ありがとうございました。

坂田氏：以上をもちまして、総合科学部創立 50 周年記念講演会を終了とさせていただきます。本日はご参加いただき誠にありがとうございました。



2.3. 記念講演

藤則 幸男氏（紀伊國屋書店代表取締役社長）
世界の人に本を届ける―紀伊國屋書店の挑戦―

8 月 10 日に行った堀川恵子さんによる記念講演会に引き続き、記念講演会第二弾として、総合科学部卒業生で、紀伊國屋書店社長の藤則幸男さんの講演会を 11 月 1 日に開催した。講演会は、広島大学東広島キャンパス総合科学部 L102 講義室にて 16 時 30 分から行い、120 名を超える参加者があった。

講演会では、岩永誠教授が司会を務め、二部制で行われた。第一部では、「世界の人に本を届ける　紀伊國屋書店の挑戦」と題した藤則さんによる講演があり、出版業界がおかれている現状やそれによりもたらされるだろうリスク、そして紀伊國屋書店がそれに対して行っている事業について聞くことができた。

第二部では、山田俊弘総合科学部長と坂田桐子総合科学科長を交え、「広大生よ、世界で活躍しトップを目指せ！」と題した対談を行った。対談と銘打ったものの、実のところ講演会参加者と登壇者の間の意見交換が主となった。対談の最後に、藤則さんより総合科学部生へ向けられた言葉、「総合科学部出身者として君たちが社会で活躍することが、次の世代の総合科学部生の活躍の足掛かりになる。そのためにも頑張ってほしい」は、総合科学部生の胸に深く刻まれたことだろう。

なお、本記念講演会は、広島大学教育室教育部のご支援を受けて実施した。小澤孝一郎副学長(全学共通教育担当)には、ここに記して感謝申し上げる。

（広島大学大学院統合生命科学研究科・総合科学部 教授 山田俊弘）